

内務部
法部

内務部第六百五十二號

九月九日

法部

法部第三十三號

九月九日

法部

九月九日

法部

九月九日

法部

九月九日

法部

九月九日

別冊教育令改正案并ニ其上奏之議共進呈候間
奏上被成下度候右ハ昨日モ畧陳述候通施政上
至急ヲ要シ候モノニ付御裁可相成候ハ、本月
二十二三日頃迄ニ布告相成候様致シ度將又本
案之旨趣ニ關シ内閣各部ニ於テ御質疑之虞モ
御座候ハ、辨明之儀文部權大書記官島田三郎
同少書記官久保田讓ニ申付置候ニ付兩官ハ向
ケ詳議相成度且本案御採用之上元老院議定ニ
被附候節ハ右兩書記官ヲ以テ内閣委員ニ被命
候様相成候ハ、幸ノ事ニ有之候此段及上申候
也

廿六

明治十三年十二月九日

甲三

文部卿河野敏鑑



太政大臣三條實美殿

（Faint, mostly illegible handwritten text in vertical columns, likely a letter or official document.)

奏議

文部卿河野敏鑑

教育令改正案ヲ上奏スルノ議

維新偃武ノ後政府大ニ文教ヲ興シ越ニ明治五年泰西ノ法度ヲ折衷シ新クニ學制ヲ布ケリ其事草創ニ屬スルヲ以テ尨雜敘無ク事態ニ齟齬スルモノナキニアラズト雖モ學校ノ設置天下ニ遍ク人民就學ノ途爰ニ洞開セシモノハ一ニ此法ノ致ス所ニアラズンバアラス爾來五七年世態大ニ改マリ百般ノ制度又隨テ變ズルヲ以テ學制漸ク其權衡ヲ失セリ是レ明治十二年九月四十七條ノ新法ヲ定メ以テ舊學制ニ代ル所以ナリ蓋シ此改正ニ當リ舊法ノ尨雜ヲ變リ過度ノ制限ヲ除クニ急ナルヨリ其勢ノ及ブ所往々放任ス可ラガルモノヲ併セテ放任スルニ至

レリ其然ル所以ノ故ヲ考フルニ亦偶然ニアラ
ザルナリ夫レ學制ノ頒布ニ當リ執事者意ヲ成
功ニ銳クシ校舍ヲ壯大ニシ外觀ヲ裝飾スルノ
事往々ニシテ免レズ是ニ於テカ學問ノ益未ダ顯
ハレズシテ人民之ヲ厭フノ念先ヅ生ス議者其
弊ノ因ル所ヲ深考セズ徒ラニ罪ヲ學事ノ干涉
ニ歸シテ之ヲ尤ム而シテ教育令此際ニ成レル
ヲ以テ爲メニ其精神ヲ謬マルモノ蓋シ寡シト
セズ臣ヲ以テ之ヲ觀ルニ前日ノ弊タル學制ノ
主義ニアラズシテ施行ノ宜キヲ失フニアリ干
渉ノ過度ニアラズシテ干涉ノ途轍ヲ過ツニヨ
レリ何ントナレバ前日ノ干涉スル所ハ唯學校
ノ設立費用ノ募集等專ラ外部ノ事ニ止マリ授業

ノ得失ヲ考ヘ費途ノ緩急ヲ察スルガ如キ内部
ノ事ニ至テハ其意ヲ經ル蓋シ寡ケレバナリ而
シテ議者一切尤ヲ干涉制度ノ上ニ歸シ及勤ノ
勢普通教育ト雖モ亦干涉ス可ラズト云フニ至
ル過テリト謂フベシ猶ホ醫師ノ治ヲ過ツハ醫
術ノ咎ニアラス而シテ醫ノ不良ナルガ爲ニ遂
ニ醫術ヲ廢セントスルガ如シ豈理ナランヤ蓋
シ普通教育ハ國民ノ品位ヲ上下スルノ力アリ
苟モ國ヲシテ開明ニ民ヲシテ良且慧ナラシメ
ントスルハ教育ノ普及ニアラザレバ不可ナリ
而シテ政府之ヲ督勵セズシテ其普及ヲ望ム殆
ド河清ノ俟ツ可ラザルガ如シ夫ノ英國ノ如キ
之ヲ歐洲大陸諸國ニ比スレバ頗ル教育ヲ放任

スルモノトス而シテ全國人民ノ無智ナル風ニ
識者ノ慨ク所トナリ世論漸ク干涉ノ已ム可ラ
ガルヲ覺知シ遂ニ一千八百三十九年ニ及デ樞
密院中ニ教育局ヲ設ケ若干ノ費用ヲ議定セシ
ヨリ年ニ其權限ヲ擴充シ費額ヲ増益シ一千八
百七十八年ノ如キハ補助金貳百拾四萬九千貳
百〇八「ポンド」ノ巨額ヲ議院ニ於テ議定スルニ
至レリ夫ノ政治ニ干涉シ事トセズ又教育ノ一
事ニ至テハ歐洲大陸ノ諸國ニ數等ヲ讓レルノ
英國ニシテ其措置尚ホ此ノ若シ其他ハ類推ス
ベキナリ蓋シ其政體ノ如何ニ關セズ苟モ文明
ヲ以テ稱セラル、國ニシテ普通教育ノ干涉ヲ
以テ政府ノ務メトセザルハナシ是レ豈普通教

育ハ其國運ニ關スル最大ナルガ故ニアラズヤ
我國ノ如キ學政ヲ施シテヨリ纔カニ數年未ダ
其効績ヲ見ガルニ於テハ深ク怪ムニ足ラズ但
其施行ノ間ニ當リ僅々ノ弊ヲ見ルガ為メニ其
精神ヲ挫シ又皮相論者ノ説ニ謬ラレテ此主義
ヲ操ムルニ至テハ何レノ日ニカ此民ト共ニ文
明ノ域ニ進ムヲ得ンヤ是レ臣ガ今日ニ當リ
教育ノ主義ヲ定メンヲ希圖シテ已マズ教育令
ノ改正案ヲ進奏スル所以ナリ或ハ曰ン客年教
育令ヲ制定シテ墨痕未ダ乾カズ今又之ヲ改正
セバ信ヲ國民ニ失フヲ如何セント是レ亦事ヲ
解セザルノ言ノミ苟モ法令ノ國家人民ニ不利
ナルヲ知ラバ隨テ之ヲ改正スル又何ノ憚ル所

カ是レアラシヤ若シ既ニ其不利ナルヲ覺ルモ
敢テ之ヲ改メズ荏苒年ヲ渉ル者ハ彼ノ不可ナ
ルヲ知テ難ヲ攘ミ來年ヲ俟テ止メントスル者
ト其異果シテ何クニ在ルヤ抑亦自家ノ便ヲ計
ルニ厚フシテ國家ヲ念フニ薄キ者ト謂ハガル
可ラズ是レ臣ガ今日改正案ヲ進奏スルニ於テ
敢テ遲疑セザル所以ナリ抑現行教育令ノ高等
諸學校ニ於ル纔カニ其名稱ヲ掲ゲルニ止マリ
之ガ制規ヲ立ルノ條ハ全ク缺如タリ臣ノ意將
ニ之ヲ補テ其體ヲ具ヘシメントスルニ在リ但
普通教育ノ衰頹ヲ挽回スルヲ焦眉ノ急ニ屬ス
ルヲ以テ今回ノ改正ハ專ラ小學ニ係ルノ事ヲ
主トシテ其他ニ及バズ謹テ此ニ本案ヲ進ムル

ニ當リ此事由ヲ一言シテ以テ豫メ他日改正ノ
端緒ニ供ス伏シテ請フ陛下ノ此ニ照察セン
ヲ臣敏謙恐惶頓首謹言

文部省

文
部
牙

教育令改正案

文部省

第 號

布告案

明治十二年肱第四十號

布告 教育令

左ノ通改正

追加候條此旨布告候事

年號 年月日

文 音 名

第 號

布告案

明治十二年

第四

左ノ通

削除追加候條此旨布告候事

年號 年月日

文
音
字

改正案

第二條 學校ハ小學校中學校大學校師範學校
專門學校職工學校其他各種ノ學校トス

理由 學術ノ生産力ニ關スルヤ大ナリト
雖モ直接ニ其力ヲ現ジ又廣ク社會ニ實業
ヲ起サレメ專門學校ニ並ンデ學校類中ノ
要部ヲ占ルモノハ職工學校ヲ以テ最ナリ
トス而シテ教育令中此名稱ナキハ頗ル闕
典ニ屬ス是レ本條改正ノ要旨ナリ

第三條 小學校ハ普通ノ教育ヲ兒童ニ授クル
所ニシテ其學科ヲ讀書習字算術地理歴史修
身等ノ初步トス土地ノ情況ニ隨ヒテ歌體操
等ヲ加ヘ又物理生理博物等ノ大意ヲ

加フ殊ニ女子ノ為ニハ裁縫等ノ科ヲ設クヘ
シ

但已ムヲ得ガル場合ニ於テハ讀書習字算術
術地理歴史修身ノ中地理歴史ヲ減ズルコト
ヲ得

理由 現行ノ令ニ於テハ讀書習字算術地
理歴史修身ノ六科ヲ以テ小學必須ノ學科
トス其一ヲ缺ケハ則チ小學ニアラザルナ
リ普通教育ニアラザルナリ夫レ地理ヲ講
シテ本邦ノ形勢ト其萬國ニ對スル關係ト
ヲ辨シ歴史ヲ學ビテ國家ノ沿革ト人事ノ
變遷トヲ考フルハ人ト成リテ社會ノ負ニ
列スル者ノ知ラザル可カラザル緊要ノ事

ナリト雖モ之ヲ修身ノ彛倫ヲ明ニシ及ビ
讀書習字算術ノ用ヲ言語ニ齊フスル者ニ
比スレハ其緩急固ヨリ迥庭アリ而レテ學
齡八年間此等六科ノ學ヲ修ムレバ其習熟
ノ觀ルヘキモノ無キニアラズト雖モ地ニ
都鄙ノ別アリ人ニ貧富ノ異アリ且今日人
民ノ生計社會ノ程度ヲ熟視スルニ全國ノ
兒童ヲ舉ゲテ盡ク八年ノ就學ヲ畢ラシメ
ントスルハ勢必不行ハルベカラザルナリ
唯八年就學ノ行ハルベカラザルノミナラ
ズ更ニ之ヲ短縮シテ六年トスルモ亦未ダ
必ズシモ能ハザルナリ且其就學ノ期愈縮
マレバ其諸科ヲ修ムルヤ愈難シトス故ニ

其六科ヲ併セ授ケテ以テ共ニ習熟セガラ
ンヨリハ寧ロ其一ニヲ減シテ以テ專ラ習
フ所ニ熟セシムルノ實用ニ適スルニ如カガ
ルナリ是レ此改正案ニ但書ヲ加ヘ地理
歴史ニ科ノ如キハ事情ニ隨ヒテ或ハ修メ
或ハ修メザルヲ得セシメ以テ學期ニ長短
アルノ條ト相照シテ以テ其宜キヲ得セシ
ムル所以ナリ

第八條 職工學校ハ諸般ノ工藝ヲ授クル所ト
ス

以上數條掲クル所何ノ學校ヲ論セス各人
皆之ヲ設置スルコトヲ得ヘシ

本條改正ノ理由ハ第二條ノ下ニ掲クルヲ

以テ更ニ此ニ贅セズ

第九條 各町村ハ府知事縣令ノ指示ニ從ヒ獨
立或ハ聯合シテ其學齡兒童ヲ教育スルニ足
ルベキ一箇若クハ數箇ノ小學校ヲ設置スベ
シ

但本文小學校ニ代ルヘキ私立小學校アリ
テ府知事縣令ノ認可ヲ經タルトキハ別ニ
設置セザルモ妨ゲナシ

理由 現行ノ令ニ於テハ町村ヲシテ公立
小學校ヲ建設スルノ義務ヲ負ハシムルニ止
リ而シテ之ヲ設クルノ制限ニ至リテハ
則チアルヲ無シ是レニ由リテ生スルノ弊一
ニシテ是ラズ蓋寒郷僻陬人口疎少ノ地

ニシテ毎村毎町必ス學校ヲ設クルトキハ
費用給セス校舍整ハズ授業舉ラズ合格ノ
教員聘スル能ハズ適當ノ器具備フル能ハズ
之ガ爲メニ兒童ノ心性ヲ傷ヒ健康ヲ害
スル等ノ弊枚舉スルニ遑アラズ此ノ如キ
ハ則チ其町村既ニ學校ヲ設置スルノ名義
アルヲ以テ其負フ所ノ義務ヲ盡セルガ如
ク見ユルト雖モ其實効ヲ考フルトキハ猶
之ヲ設ケザルト異ナルナキナリ又其數町
或ハ數村聯合シテ設立スル者ニ於テ之ガ
適當ノ制限ナキヲ以テ三四里若クハ五六
里ノ間僅ニ一校ヲ設立スルアリ或ハ未タ
甚ダ廣遠ナラザルモ山河ノ阻隔スルモノ

ヲ併セテ一學校區ヲ立ツルアリ是レ皆學
齡兒童ノ通學ニ耐フル能ハザル所ナリ或
ハ人口稠密ニシテ生計ノ度甚ダ低カラザ
ルモ其人民未ダ學業ノ利ヲ曉ラザルガ故
ニ學校ノ爲メニ資財ヲ出スヲ好マズ纔ニ
狹隘ノ校舍ヲ起シテ以テ其義務ヲ免ル、
ノ口實ト爲シ而シテ其學舎狹隘ナルヲ以
テ學齡兒童ヲ容ル、ニ足ラズ其レヲシテ
多ク不學ニ終ラシムルアリ是レ皆學校設
置ニ制限ナキノ致ス所ニアラズンバアラ
ザルナリ而シテ其弊猶未ダ此ニ止ラザル
者アリ夫レ學制頒布以來數町村力ヲ併セ
テ學校ヲ設立シ其規模略觀ルベキ者往々

之レアリト雖モ去歲教育令發行ニ至リ學校分合ノ事ヲ舉ゲテ之ヲ町村ニ屬シテヨリ其學校敷地ノ屬スル町村外ノ者ハ之ヲ視ルヲ自己町村ニ關セザル者ノ如ク校費ヲ出サズ兒童ヲ遣ラズシテ連リニ分離ヲ主張スル者アリ甚キハ曩ニ協議上ヨリ積ミ立テタル資金ヲ分割シテ各自ニ學校ヲ設立セントスル者アリ而シテ其弊ノ窮極スル所遂ニ合資ヲ以テ設立セル整備ノ學校ヲ毀テ各自徴力ノ學校ヲ創起シ其費用ハ前日ニ倍シ而シテ却リテ學事ヲシテ振ハザルニ終ラレム是レ等ノ如キモ現今ノ令ニ於テハ之ヲ禁ズル能ハザルナリ是

レ今面ノ改正ニ於テ「兒童ヲ教育スルニ足ルベキ」云々ノ字句ヲ加ヘテ其設立ノ目的ヲ明ニシ又其制限アルノ精神ヲ明示レ「府知事縣令ノ指示云々ノ文字ヲ加ヘテ其果シテ兒童ヲ教育スルニ足ルヤ否ヤヲ監スルノ權ヲ府知事縣令ニ付シ以テ妄リニ分合スルノ弊ヲ制セントス其但書ニ於テ「本文小學校ニ代ルベキ」ノ文字ヲ以テ「公益タルベキ」ノ句ニ換フルモノハ蓋シ公益ノ文字タル意義稍不定ニ屬スルヲ以テナリ

第十條 各町村ハ學務ヲ幹理セシメンカ爲ニ小學校ヲ設置スル獨立或ハ聯合ノ區域ニ學務委員ヲ置キ戸長ヲ以テ其負ニ加フヘシ

但人貧ノ多寡給料ノ有無及其額ハ區町村
會之ヲ評決シ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘ
理由 本條ノ改正案ニ三箇ノ要點アリ學
務委員ヲ設置スルノ地ヲ定ムル一ナリ戸
長ヲ以テ其負中ニ加フルニナリ區町村會
ヲ以テ委員ノ數及ビ其給料ヲ評決セシメ
又府知事縣令ヲ以テ之ヲ認可セシムル三ナ
リ夫レ現行ノ令ニ於テハ唯學務委員ヲ
置クベシト云フニ止マリテ其之ヲ何レノ所
ニ置クヲニ言ヒ及バズ則チ學校ヲ設置
維持スルノ一區域ニ置クベキ乎抑町村ノ
聯合シテ之ヲ設置維持スルモ猶毎町村ニ
置カザル可ラザル乎各地ニ於テハ之ヲ明

知スル能ハザルヲ以テ之ガ説明ヲ請フモノ
往々之レアリ是レ改正文中「小學校ヲ設
置スル云々」ノ文字ヲ掲グル所以ナリ夫レ戸
長ノ職タル町村公共ノ事務ヲ統グルヲ以
テ夫ノ衛生委員ノ如キモ亦之ヲ助ケテ以
テ其事ヲ行ヘリ然ルヲ學事ニ於テハ獨
リ學務委員專ラ之ヲ掌理スルトキハ其施
為ノ力薄弱ナルノミナラズ或ハ事務重複
ノ煩ヲ起シ或ハ彼此扞格ノ意ヲ生ズルノ
憂アリ且ツ各地方ノ景況ヲ通觀スルニ大
凡戸長ト爲ル者ハ其町村ニ名望アル者又
ハ材幹衆ニ超エル者又ハ舊家ニシテ郷閭
ニ尊重セラル、者等ニシテ固ヨリ其町村

人民ノ上流ニ居ル者ナルガ故ニ其言自ラ
行ハレ易キノ勢アリ故ニ之ヲシテ學務委
員ト共ニ事ニ從ハシメハ其學事ニ裨益ア
ル蓋シ細小ニアラザルナリ當是ノミナラ
ス區町村會起リテヨリ以來町村公共費ノ
豫算ヲ立テ、之ヲ議場ニ辯明スルハ則チ
戸長ノ主トシテ任スル所ナリ而シテ學校
ノ費用亦其一ニ居レリ蓋シ現行教育令第
十條第十二條ニ由レバ町村ノ學費ヲ議會
ニ辯明スルハ學務委員ノ務メタラザルベ
カラズ而シテ實際ニ於テハ却リテ之ヲ戸
長ノ爲ス所ニ歸セリ其事務ノ相交渉シテ
分離シ難キ既ニ此ノ若クンバ則チ令中明

文ヲ掲ゲテ以テ其職務ヲ定メザル可ラス
是レ戸長ヲ以テ委員ノ中ニ加フル所以ナ
リ抑學務委員ノ職タル常ニ町村ノ學事ヲ
幹理ス既ニ此職アリ則チ其適當ノ給料ナ
カル可ラス蓋シ之アルヘクシテ而シテ之ナ
キトキハ委員タルモノ實ニ其職任ノ責
ナキ者ノ如シ然バ則チ必ス之ヲ與フルト
センカ或ハ富豪有爲ノ人ニシテ此撰ニ當リ
身公益ニ任ズルノ榮譽ヲ悦ビ給料ヲ受ク
ルヲ屑トセザルアリ故ニ此ヲ與フルト否
ザルトハ土地ノ情況及ビ委員其人ノ地位
ニ由リテ之ヲ斟酌セザル可ラズ必ズ之
ガ一定ノ制度ヲ立テ、以テ之ヲ規スルヲ

得ス是レ其給料ヲ町村會ノ議ニ付スルヲ
要スル所以ナリ然リト雖モ之ヲ與フベク
レテ而レテ與ヘズ遂ニ委員ヲシテ無報ノ
勞ニ服セシメ因リテ以テ學事ヲ振ハサル
ニ至ラシムルハ亦往々見ル所ノ通弊ナリ
故ニ專ラ之ヲ町村ニ委セズ必ズ府知事縣
令ノ認可ヲ經セシメテ以テ一方ニ偏倚セ
ザランヲ期ス是レ本條改正ノ大旨ナリ
第十一條 學務委員ハ町村人民其定員ノ二倍
若クハ三倍ヲ薦舉シ府知事縣令其中ニ就テ
之ヲ選任スヘシ

但薦舉ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ
文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

理由 現行ノ令ニ於テ學務委員ハ町村人
民ノ撰舉タルベシトアリ而レテ其選舉セル
者ハ直チニ委員ト爲ルヲ得ル乎抑刑餘ノ
人ノ若キ公共ノ信憑ヲ托スルノ性質ヲ缺
クモノニ於テハ地方官法律ニ因リテ附與
セラレタル監督ノ權(教育令第十二條)ニ
因リテ之ヲ改選セシムルヲ得ル乎或ハ一
旦委員ト爲ルノ後ト雖モ其人職任ニ適セ
サルニ於テハ地方官之ヲ改選セシムルヲ得
ル乎是等ノ諸點皆令中ニ明揭セサルヲ以
テ實施ノ際疑義ヲ生ズル者ナキニアラズ
若シ撰舉セラル、者ハ直チニ委員トナリ
如何ノ事由アルモ地方官之ヲ進退スルノ

カナシト解釋セバ則チ是ヨリ生ズルノ弊實
ニ言フニ勝ヘガルモノアリ蓋シ町村學事
ノ舉ルト否ガルトハ學務委員其人ヲ得
ルト否ガルトニ由レリ何トナレバ兒童ノ就
學ヲ促シ學資ノ募集ヲ計リ學校ノ維
持ヲ力メ不就學ノ事故ヲ查スル等ハ地方
官郡區長ノ之ヲ管理スルアリト雖モ躬其
町村ニ住シ親ク之ガ事情ヲ識ルハ即チ學
務委員ノ深切ニシテ手ヲ下シ易キニ如ザ
レバナリ然レ氏人民未ダ學問ノ利ヲ曉ラ
ズ劇場祭禮ノ爲メニ千金ヲ捐ツルモ學校
ノ爲メニ拾金ヲ出スヲ悦バズ俳優力士ノ爲
メニ款待ヲ盡スモ教員ノ爲メニ禮意ヲ

表スルヲ厭フガ如キ未ダ普通學ノ人生ニ
必需ナルヲ知ラズ就學ハ社會ノ公務タル
ヲ辨ゼガルノ地方ニ於テハ學務委員其人
ヲ得テ兒童就學ノ督促ニ遭ハンヲ恐レ勉
メテ文筆ヲ解セズ學事ヲ辨ゼガルノ人ヲ
舉ケ甚キハ刑餘ノ人ヲ撰バントスル者ア
ルニ至ル故ニ其制限ノ設ケ豈人今日ニ已ム
ヲ得ンヤ然リト雖モ委員ハ人民ノ委託ヲ
受ケテ町村公共ノ義務ヲ代理スル者ナル
ヲ以テ人民ノ之ヲ推薦スルヲ得ルハ實ニ町
村自治ノ精神ニ出ヅル者ナレバ固ヨリ其
疆界ヲ侵スベキニ非ス唯府知事縣令ヲ
シテ其監督ノ權ヲ此際ニ實行セシメンヲ

要ス然レ氏其法タル推薦人ヲ得ガルニ當
リ之ヲ拒ミテ再撰セシムガ如キハ未ダ其
宜キヲ得タリト云フ可カラズ何ントナレバ
其事タル唯被薦者ノ名譽ヲ毀キ薦者
ノ煩ヲ重ヌルノミナラズ其レヲシテ自ラ不
快ノ念ヲ懷カレメ以テ官民乖離ノ端ヲ
開クニ庶幾ケレバナリ故ニ當初其員ノ二
倍若クハ三倍ヲ推薦セシメ其中ニ就キテ
選任スルヲ得ルヲ改正案ノ若クナラシメ
バ則チ一時ニシテ二回若クハ三回ノ薦舉
ヲ行フト其効ヲ同クセントス此クノ如シ
バ則チ官民共ニ偏重ノ弊無キヲ得ン夫ノ
薦舉ノ制限ノ若キ倘文部省ニ於テ之ヲ定

メ國中ノ廣キ都鄙ノ隔タレルヲ省セス畫
一ノ制度ヲ以テ之ヲ規セントセバ或ハ事
情ニ適セズレテ扞格行ハレザルノ地ナキ
ヲ保ツ可ラス故ニ府知事縣令ヲシテ先ツ
其案ヲ起草セシメ而シテ後其區々ニ分歧
シ東隅西陬之ガ權衡ヲ失フナカラシメン
ガ爲メ且其事ノ重要ナルガ爲メニ之ヲシ
テ文部卿ノ認可ヲ請ハシメントス是レ本
條改正ノ要旨ナリ

第十四條 學齡兒童ヲ就學セシムルハ父母後
見人等ノ責任タルヘシ

第十五條 父母後見人等ハ其學齡兒童ノ小學
科三箇年ノ課程ヲ卒ラサル間已ムヲ得サル

事故アルニアラサレハ少クトモ毎年十六週
日以上就學セシメサルヘカラス又小學科三
箇年ノ課程ヲ卒リタル後ト雖モ相當ノ理由
アルニアラサレハ毎年就學セシメサルヘカ
ラス

但就學督責ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草
シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

理由 現行ノ令ニ於テハ事故アリテ就學
セシメザル者ハ其事由ヲ學務委員ニ陳述
スベシトアリ而シテ其事故トハ如何ナル
モノヲ指スヤ一定ノ釋義ナク又行政規則
ヲ以テ之ヲ定メシムルヲ言ハズ是レ兒
童ノ就學ヲ以テ父母後見人ニ負ハシムル

ノ義ト協ハガルナリ何ントナレバ一方ニ
於テハ法律上ノ責ヲ父母後見人ニ負課シ
一方ニ於テハ其負課ヲ免ル、ト免レザル
トノ要質ヲ定メザレバナリ況ンヤ其之ヲ
學務委員ニ陳述スルニ止マルニ於テヤ
且第十四條ニ於テハ十六箇月ヲ以テ兒童
就學ノ最短期トシ此期ヲ過グルキハ就學
ノ責ナシトセリ夫レ兒童六歳ニシテ小學
ニ入り纔ニ一年四箇月ヲ經テ修ムル所ノ
普通學ハ成丁ノ後ニ至リ果シテ其身ヲ益
スルニ足ルベキ乎假令改正案第三條ノ如
ク地理歴史ノ二科ヲ除キ簡易ノ科ノミヲ
修メシムルモ尚且其用ニ適セザルヲ知ル

ナリ既ニ其用ニ適セズ安ゾ之ヲ以テ責ラ
免ル、ノ定限トスルヲ得ンヤ況ンヤ唯十
六箇月云々ト言フトキハ假令父母タル者
財計餘リアリ兒童ヲシテ全備ノ小學ヲ修
メシムルニ足ルト雖モ己レ學問ヲ悦バザ
レバ則チ兒童ノ就學十六箇月ヲ以テ我ガ
義務畢レリト爲シ直チニ之ヲシテ退學セ
シムルモ既ニ法律ノ之ヲ許スアレバ何ニ
因リテ之ヲ拒止スルヲ得ンヤ而シテ兒
童ハ固ヨリ智慮鮮キガ故ニ遊戲百端唯其
課業無キヲ悦ビ徒ニ歲月ヲ涉リ其人ト成
ルニ及ビ始メテ自ラ悔イ是ニ至リテ父母
ヲ恨ムルモ亦何ノ益カアラン故ニ此ノ如

キ場合ニ於テハ社會ノ集力即チ政府ナル
者此等私人ノ利害ヲ推定シテ其間ニ干涉
シ幼者ノ權利ヲ保護スルハ勢ノ已ム可カ
ラザルモノトス何ントナレバ兒童タル者
未ダ己レノ利害ヲ判別スルノ能力無ク而
シテ父母又之ヲ賊フニ方リテハ則チ政府
ヲ除クノ外又之ヲ擁護スル者アラザレハナ
リ蓋シ律眼ノ幼者ヲ見ルヤ成丁ノ人ニ異
ナリ夫ノ幼者ノ職業時間ヲ制限スル事ノ
如キ以テ見ルベシ故ニ雇主ト父母トノ約
束ヲ以テ幼者ヲ工場ニ役セシムルニ當リ
父母ハ雇銀ノ多キヲ貪リ雇主ハ使用時間
ノ長キヲ利シ而シテ兒童脆弱ノ體ヲ役ス

ル常度ニ過ギシムルモ幼者自ラ其身ニ巨
害アルヲ曉ラズ其人ト為ルニ及ビテ身體
枯痺竟ニ用ニ耐ヘザルニ至ル此ノ如キハ
少年自衛ノ力無ク父母又之ヲ賊フモノニ
シテ政府ヲ除クノ外能ク之ヲ防ク者アル
ナレ是レ泰西文明ノ國ニ於テ幼者勞役ノ
時間ヲ制限スルヲ以テ社會ノ幸福ヲ保ス
ル必要ノ法律トスル所以ナリ而シテ普通
教育ノ責ヲ父母ニ課スルモ亦主義ヲ此理
ニ均クスルトキハ則チ決シテ之ヲ緩漫ニ
付ス可カラザルナリ故ニ今回ノ改正案ニ
於テハ已ムヲ得ザルノ事故アルニアラ
ザレハ兒童ヲ就學セシメザル可カラザル

ノ義ヲ定メ且其最短期十六箇月ヲ改メテ
三箇年トスルモノハ三年ノ時月ヲ費ヤシ
テ以テ小學最低ノ課程ヲ全ク修ムルヲ得
バ稍其終身ヲ裨益スルニ及ブベキガ為メ
ナリ而シテ土地ノ事情職業ノ狀態ニ隨ヒ
三箇年連續シテ學ニ就ク能ハザルモノハ
毎年時ニ從ヒテ就學シ三箇年ノ課程ヲ卒
ルニ至リテ始メテ其責ヲ免レシム其毎年
十六週ヲ以テ限トスル亦偶然ニアラザル
ナリ夫レ小學ノ開校ヲ毎年三十二週ト定
ムルトキハ三箇年ニシテ九十六週ナリ學
齡八箇年間毎年就學スルコト十六週ナル
トキハ通計一百二十八週ナリ是レ三箇年

連續シテ以テ就學スル者ヨリ其時ヲ増ス
一三十二週即チ一年ノ開校期ヲ加フルニ
同ジ其之ヲ増加スル所以ノ者ハ夫ノ連續
シテ以テ學ブモノハ終始學問ノ念ヲ離レ
ズト雖モ毎年十六週間學ブモノハ一年強
半他ノ業ニ從事シテ學問ノ念殆ド断ユ其
念ヲ離レガル者ハ業速ニ成リ易ク其念断
ユルモノハ遺忘ノ患免レ難シ故ニ通計一
年ノ開校期ニ當ルノ時ヲ加ヘテ以テ之ヲ
補フノミ抑法律ハ其既ニ三年ノ課程ヲ卒
フルモノニ於テ一切就學ヲ望マガルベキ
乎曰ク否ガルナリ夫レ三年ニシテ業ヲ卒
フルハ小學最低ノ課程ノミ豈之ヲ以テ足

レリトスト謂ハンヤ故ニ既ニ之ヲ卒フル
者ト雖モ生計餘アリ且職業ノ為スベキ無
キモノハ之ヲシテ學齡間就學セシメン
ト要ス然リト雖モ人ニ貧富アリ體ニ強弱
アリ又初ヨリ就學スル能ハガルアリ或ハ
三年就學スル能ハガルアリ故ニ已ムヲ得
ガルノ事故アル者ハ全ク其責ヲ免セシメ
ガル可ラズ既ニ三年ノ業ヲ卒ヘテ特殊ノ
學ヲ修メントスルモノアリ職業工藝ニ從
事セントスル者アリ其相當ノ理由アルハ
學齡間普通學ニ就カガルモ亦可ナリ而シ
テ之ヲ實施スルニ當リ如何ナルモノカ是
レ不得巳ノ事故トスベキ如何ナルモノカ

是レ相當ノ理由トナスベキ其大綱ヲ豫定
スルヲ無ケレバ寛嚴人ニ因リテ異ニシテ
法律ノ精神ヲ破リ人民ノ苦害ト爲ルノ弊
ナキヲ保ツ能ハズ是レ就學督促ノ規則ヲ
要スル所以ニシテ府知事縣令之ヲ起草シ
文部卿ノ認可ヲ經セシムルハ其理由第十
一條但書ノ説明ニ同ジ是レ兩條改正ノ要
旨ナリ

第十六條 小學校ノ學期ハ三箇年以上八箇年
以下タルヘク授業日數ハ毎年三十二週日以
上タルヘシ

但授業時間ハ一日三時ヨリ少カラス六時
ヨリ多カラサルモノトス

理由 學期ト就學ノ期限トハ互ニ交渉シ
テ分離ス可ラサルモノトス何ントナレバ
其比較相協ハガレハ錯亂レテ行フ可ラガ
レバナリ是レ本條最短ノ學期四箇年ヲ改
メテ三箇年トシ一歲ノ授業四箇月以上ヲ
改メテ三十二週日以上トナシ第十五條ト
照應セシムル所以ナリ且現行ノ令ニ於テ
ハ一日ノ授業時間ニ制限ナキカ故ニ纔カ
ニ一時間ニ滿タサルノ授業ヲ以テ法律要
スル所ノ開校日數ニ充ツルモノアリ是ノ
如キハ其名アツテ實ナキモノトス或ハ速
成ノ功ヲ貪リテ一日八時間餘ニ及ブモノ
アリ是ノ如キハ兒童ノ心性體質ニ適セズ

徒ラニ倦怠ヲ生ゼシメテ終ニ益ナキノミ
ナラズ却テ健康ヲ損ズルノ害アリ是レ本
條ノ但書ニ於テ其制限ヲ設ケタル所以ナ
リ

第十七條

學齡兒童ヲ學校ニ入レス又巡回授
業ニ依ラスレテ別ニ普通教育ヲ授ケントス
ルモノハ郡區長ノ認可ヲ經ヘシ

但郡區長ハ兒童ノ學業ヲ其町村ノ小學校
ニ於テ試験セシムヘシ

理由 兒童ヲシテ學校ニ入ラシメ若クハ
巡回授業ニ就カシムル所以ノモノハ他ニ
アラズ其主眼唯普通教育ヲ受シムルニ
アルノミ故ニ此等ノ手段ヲ除クノ外別ニ普

通教育ヲ受シムルノ途アル例ヘバ家庭ニ
於テ兒童ヲ教育スル者ノ如キハ亦之ヲ許
サバルヲ得ズ然リト雖モ之ヲ以テ口ニ藉
キ以テ就學ノ責ヲ塞カントスルモノ、如キ
或ハ其無キヲ保ス可ラズ是ノ如キハ則
チ豈至當ノ監制ヲ為サバルヲ得ンヤ而シ
テ現行ノ令ニハ此事ヲ缺ケリ是レ今回ノ
改正ニ於テ初ニハ郡區長ノ認可ヲ經セシ
メ又時々試験ヲ為シテ以テ其効ヲ監スル
所以ナリ

第十八條

小學校ヲ設置スルノ資力ニ乏シクシ
テ巡回授業ノ方法ヲ設ケ普通教育ヲ兒童ニ
授ケントスル町村ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘ

理由 現行ノ令タル學校ヲ設置スルノ資
力ニ乏キ地方ニ於テハ教員巡回ノ方法ヲ
設ケテ兒童ニ教授セシムルコトヲ得ベシ
ト云フニ止マリ其巡回授業ヲ為スヲ得ル
ニハ何等ノ手續ヲ以テスベキヲ説ス是レ
町村ニ學校ヲ設置スルノ責ヲ負シムルノ
義ニ違フモノナリ何ントナレバ町村ノ人民
學校ヲ設クルヲ悦バザルモノ我地方ハ學
校ヲ立ルノ資力ニ乏シト聲言シロク巡回
授業ニ籍テ僅カニ一二ノ教員ニ數十町村
ノ兒童ヲ托シ授業ノ實終ニ舉ラザルニ至
ルモ曾テ巡回授業ニ一定ノ制度ナキ以上

ハ官又之ヲ如何トモスル能ハザレバナリ
且ツ其學校ヲ設置スルノ資力ニ乏キト否
トハ町村自ラ之ヲ判定スルヲ得ル乎地方
官之ヲ判定スル乎法律ニ於テ毫モ之ニ言
及スルナシ抑亦不備ノ文ト謂フベシ是レ
今回ノ改正ニ於テ府知事縣令云々ノ句ヲ
増加セル所以ニシテ地方ノ情況ニヨリテ
之ヲ設クルヲ得セシムルモ亦徒ラニ之ヲ
口ニ籍テ苟モ其責ヲ免ル、者無ラシメン
ト欲スルナリ

第二十條 公立學校幼稚園書籍館等ノ設置廢
止其府縣立ニ係ルモノハ文部卿ノ認可ヲ經
ヘク其町村立ニ係ルモノハ府知事縣令ノ認

可ヲ經ヘシ

理由 現行ノ令タル公立學校ノ設置廢止
ハ府知事縣令ノ認可ヲ經セシムルモノトス
抑公立學校トハ官立私立ノ中間ニ位スル
二種ノ學校ヲ指テ云フモノナリ其府縣ニ
於テ地方稅其他府知事縣令管スル所ノ費
種ヲ以テ設立スルモノ之ヲ府縣立ト云
ヒ其町村人民ノ協力ヲ以テ設立スルモノ
之ヲ町村立ト云フ夫レ府縣立ニ於テハ府
知事縣令恰モ其校主タルノ位地ニ在ルモ
ノ、如シ而シテ現行ノ令ハ都テノ公立ヲ
概括シテ之ヲ府知事縣令ノ認可スルモノ
トセリ然ラバ則チ府縣立ニ於テハ府知事

縣令自ラ之ヲ設立シ自ラ之ヲ認可スベシト
謂フガ如キモノニシテ其理ニ協ハザル
復々辨スルニ足ラザルナリ是レ今回ノ改
正ニ於テハ同一公立ノ名稱中ニ就キテ彼
此ヲ甄別シ其甲ハ之ヲシテ文部卿ノ認可
ヲ經セシメ乙ハ之ヲシテ府知事縣令ノ認可
ヲ經セシム此ノ若クニシテ後始メテ倫
次アリト謂フベシ且單ニ學校ヲ舉テ其他
教育上須要ノ局部ニ及バザルハ法律ノ不
備ナルニ由リ今幼稚園書籍館等ノ文字ヲ
増加シテ以テ其意ヲ補ヘリ

第二十一條

私立學校幼稚園書籍館等ノ設置
ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘリ其廢止ハ府知

事縣令ニ開申スヘシ

但公立小學校ニ代用スル私立小學校ノ廢止ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

理由 現行ノ令ニ於テハ私立學校ノ設立ヲ府知事縣令ニ開申セシムルニ止マル是ニ由テ生ズルノ弊亦尠カラズ夫レ學校ハ世間普通ノ營業ト同カラズ人ノ心性ヲ陶冶シ智徳ヲ左右スルノ要具タリ故ニ其法宜キヲ得レバ俗ヲ化シ智ヲ開クノ益アリト雖モ其宜キヲ失ヘバ則チ小ニシテハ人ヲ戕ナヒ大ニシテハ俗ヲ壞ルノ害アリ其レ然リ故ニ學術ナキノ人ハ師ト爲ス可カラズ素行修マラザル人ハ師ト爲ス可カラズ

然ルニ現行法ノ如ク學校ノ設立ヲ開申ニ止ムルトキハ學術ナキノ人ニシテ此利器ヲ妄用スルヲ得ルノミナラズ刑餘ノ人ト雖モ亦抗顔師位ニ居ルコトヲ得ントス夫レ人ノ身體ヲ左右スル者ハ醫師ナリ人ノ心性ヲ左右スル者ハ教師ナリ此要點ニ至テハ公私ノ別ニ因テ變ゼザルモノナリ而シテ醫師ノ業ヲ營ムハ官其性格ヲ鑒ミ教師ノ校ヲ開クヤ其自爲ニ任ス豈人ノ心性ハ身體ニ如カズト謂ハンヤ是レ今回ノ改正ニ於テ其設立ヲ認可セシムル所以ナリ抑其廢止ニ至テハ此ニ異ニシテ官此ニ關スルノ權ナシトス何ントナレバ其設立ヤ將サ

ニ為スアラントスルモノニシテ事積極
ニ屬ス是レ世ヲ益スト雖モ亦之ヲ害ス
ルノ力アリ是レ官ノ認可ヲ要スル固ヨリ
ナリト雖モ其廢止ヤ之ニ及レテ將サニ為
スナカラントスルモノニシテ事消極ニ屬ス
是レ世ニ益セズト雖モ亦之ヲ害スルノ力
無シトス政府ハ私人ノ害ヲ為スヲ遏ム
ルノ任アリト雖モ其レヲシテ益ヲ為サシ
ムルヲ責ムルノ力無シ是レ其校主ノ意ニ
放任セザル可ラザル所以ナリ獨リ公立學
校ニ代用スルノ小學校ニ於テハ之レニ異ナ
リ其校アルカ為メニ公立小學校ヲ設クル
ノ責ヲ町村ニ免レシムレバ則チ此私立タ

ルヤ恰モ公立ト同一ノ權利ヲ有セリ故ニ
律眼ノ之ヲ見ル公立ノモノニ同カラザル
ヲ得ズ況ンヤ此校ニシテ一旦廢止セラル、
ニ於テハ其町村ノ兒童直チニ就學ノ
途ヲ失フニ於テヤ故ニ之ヲ廢止セザル
ヲ得ザルノ場合ニ於テハ町村ヲシテ別ニ
小學校ヲ設シメザル可カラズ則チ官ニ於
テ其廢止ヲ豫知スルニアラザレバ不可ナ
ル所以ナリ是レ本條改正ノ大旨ナリ

第二十二條 町村立私立學校幼稚園書籍館等
設置廢止ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ
文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第二十三條 小學校ノ教則ハ文部卿頒布スル所

ノ綱領ニ基キ府知事縣令土地ノ情况ヲ量リ
テ之ヲ編制シ文部卿ノ認可ヲ經テ管内ニ
施行スヘシ

但府知事縣令施行スル所ノ教則ニ準據シ
難キ場合アリテ之ヲ斟酌増減セントシ府
知事縣令之ヲ許可セントスルトキハ其意
見ヲ付シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

理由 現行ノ令タル公立學校ノ教則ハ文
部卿ノ認可ヲ經私立學校ノ教則ハ府知事
縣令ニ開申セシム此區別タル甚ダ謂レナ
キモノトス政府ノ學校ニ於ル單ニ公私ノ
別ニ據テ監督ノ途ヲ異ニスベキニアラズ
必ズ其教學ノ性質ニ就テ之ヲ處スベキ理

義アルノミ何ゾヤ夫ノ專門工藝職業等ノ
學校タル各々其特殊ノ性質アリテ特殊ノ
智術ヲ要スルヲ以テ官ノ利トスル所民ノ
不利トスル所タルモ亦知ル可ラズ民ノ見ル
所官ノ監ミル所ニ劣ルト謂フ可ラズ語
ニ所謂老農老圃ニ如スト即チ此理ニ同シ
故ニ此類ノモノニ於テハ必ズ官其教則ノ
細目ニ干涉シテ取裁スルヲ要セザルナリ
獨リ小學校ニ至テハ是レニ異ナリ其人ヤ
學齡兒童ニシテ其學ヤ普通教育ナリ其性
質既ニ定マレリ其目的固ヨリ一ナリ其教
則モ亦此性質ト此目的トニ合セザル可カ
ラズ若シ其私立ニ係ルノ故ヲ以テ此性質

ニ協ザルモ亦可ナリト謂ハンカ小學ノ名
稱何ニ因リテカ定マラン況ンヤ其公立私
立ノ別ナク小學ニ入ルトキハ則チ就學ノ
責ヲ盡スモノト法律ノ之ヲ認ムルニ於テ
ヲヤ故ニ今回ノ改正案ニ於テハ其小學ニ
關スルノ條ハ公私ヲ問ハズ律眼悉ク同一
ノ者ヲ做セリ此理ヲ推シテ之ヲ察スルニ
現行令ノ第二十二條第二十三條ノ區別タ
ル干涉スベキニ干涉セズ而レテ干涉スベ
カラザルニ干涉スルモノニシテ大ニ其倫
次ヲ失フモノタルヲ灼知スベキナリ其小
學校ニアラザル諸種學校ノ教則細目ハ官
之ヲ取裁スルヲ要セザルノ理ハ既ニ之ヲ

明カセリ然ラバ則チ全ク之ヲ放置スベキ
乎曰ク否其設立ヲ認可スルト否トハ略一
定ノ限界ナカル可カラズ唯其學問ノ自由
ヲ掣肘ス可カラザルノミ學校設置ノ目的
講學ノ要領教員ノ履歷學校維持ノ方法ノ
如キ皆官ノ知ラザル可カラザルモノナリ其
廢止ニ於ルモ亦其理由ヲ知ルニアラザレ
バ認可スルト否トノ標準ヲ立ツルニ由ナ
シ是レ其要領ヲ定ムルノ規則ヲ要スル
所以ナリ其小學ニ於ル固ヨリ一定ノ主義
ニ基クト雖モ全國ノ廣キ都鄙ノ隔タル其
細目ニ至リテハ固ヨリ取捨セザル可ラズ
是レ文部卿之レガ綱領ヲ定メ府知事縣令

リシテ土地ノ情况ヲ量リ教則ヲ編制セシ
ムル所以ナリ而シテ一地方中又之ヲ取捨
セガル可カラザルニ於テハ更ニ斟酌増減
シテ以テ其事情ニ應ズルヲ得セシム但其
範圍ヲ超脱シ普通教育ノ大旨ニ違ハガラ
ンガ為メニ官ノ認可ヲ經テ之ヲ行フヲ得

第二十六條 公立學校ノ敷地ハ免稅タルヘシ

第三十三條 各府縣ハ小學校教員ヲ養成セン
カ為ニ師範學校ヲ設置スヘシ

理由 現行令ノ本條ニ於ケル各府縣ニ於
テハ便宜ニ隨テ公立師範學校ヲ設置スベ
シトアリ既ニ便宜ト云フトキハ之ヲ設ケ

ガルモ亦可ナルガ如シ夫レ小學ノ整否ハ
教員ノ良否ニ關シ教員ノ良否ハ師範學校
ノ整否ニ原セリ師範學校ノ小學ニ於ケル
ヤ必ス消長ヲ同クスル者ニシテ師範學校
衰ヘテ小學校ノ獨り盛ナルハ各國ノ實歴
ニ徴シテ未ダ之レアラザルナリ我國普通
學ヲ督勵シテヨリ今ニ及ンデ各府縣師範
學校ノ設ナキ者アラズト雖モ其年ヲ歷ル
尚ホ淺ク教員ニシテ師範學科ヲ卒業シタ
ル者ハ全國ニ通シテ十中ノ一ニ過ギズ他
ハ皆舊時ノ學ヲ講ジテ教授ノ術ヲ知ラザ
ル者ナリ且偏境僻地ニ至テハ實ニ良師ニ
乏シキヲ以テ大抵僧侶修驗習字師ノ徒少

ヲシテ土地ノ情況ヲ量リ教則ヲ編制セシ
ムル所以ナリ而シテ一地方中又之ヲ取捨
セガル可カラザルニ於テハ更ニ斟酌増減
シテ以テ其事情ニ應ズルヲ得セシム但其
範圍ヲ超脱シ普通教育ノ大旨ニ違ハガラ
ンガ為メニ官ノ認可ヲ經テ之ヲ行フヲ得
セシム是レ第二十二條第二十三條改正ノ
要畧ナリ

第三十三條 各府縣ハ小學校教員ヲ養成セン

カ為ニ師範學校ヲ設置スヘシ
理由 現行令ノ本條ニ於ケル各府縣ニ於
テハ便宜ニ隨テ公立師範學校ヲ設置スベ
シトアリ既ニ便宜ト云フトキハ之ヲ設ケ

ガルモ亦可ナルガ如シ夫レ小學ノ整否ハ
教員ノ良否ニ關シ教員ノ良否ハ師範學校
ノ整否ニ原セリ師範學校ノ小學ニ於ケル
ヤ必ス消長ヲ同クスル者ニシテ師範學校
衰ヘテ小學校ノ獨り盛ナルハ各國ノ實歴
ニ徴シテ未ダ之レアラザルナリ我國普通
學校ヲ督勵シテヨリ今ニ及ンデ各府縣師範
學校ノ設ナキ者アラズト雖モ其年ヲ歷ル
尚ホ淺ク教員ニシテ師範學科ヲ卒業シタ
ル者ハ全國ニ通シテ十中ノ一ニ過ギズ他
ハ皆舊時ノ學ヲ講ジテ教授ノ術ヲ知ラザ
ル者ナリ且偏境僻地ニ至テハ實ニ良師ニ
乏シキヲ以テ大抵僧侶修驗習字師ノ徒少

シク字ヲ識リ書ヲ讀ム者ノ纔カニ其負ニ
充ルノミ學事ノ振ハサル職トシテ其一原
因タラズンバアラズ故ニ今ヨリ以來師範
生徒ノ教養ニハ最モカラ致サバ可カラズ
而シテ小學ノ設ケ人民必為ノ責タル以上
ハ師範學校ノ設ケ亦豈苟モ便宜ニ任スベ
キモノナランヤ是レ則チ便宜云々ノ句ヲ削
ル所以ニシテ「小學教員ヲ養成センガ為
ニ」ノ句ヲ加フルハ其目的ヲ明示セントスル
ニアルナリ

第三十八條 小學校教員ハ官立公立師範學校ノ
卒業證書ヲ有スルモノトス

但本文師範學校ノ卒業證書ヲ有セスト雖

モ府知事縣令ヨリ教員免許狀ヲ得タルモノ
ハ其府縣ニ於テ教員タルモ妨ケナシ

理由 現行令ノ本條ニ於ケル單ニ師範學
校云々トアリテ其官公私ノ別ヲ言ハズ是
レ構成不備ノ私立師範學校ヲ起シ簡易ノ
學科ヲ教授シテ卒業證書ヲ與ヘ之ヲ受ル
ノ人ヲシテ教員タルヲ得セシメントス或ハ
曰ン私立ト雖モ其整備スル者ニ於テハ亦
可ナラズヤト然リト雖モ是レ實際上必ス
無キノ事ナリ師範學校ノ性質タル之ヲ教
ユル者因テ以テ利益ヲ占ルノ餘地ナシ公共ノ
負擔スル所トナリテ初メテ維持スルヲ得ル
者トス故ニ私立ニ係ルモノハ必ズ其費用ヲ

減省シテ其構成不備タラザルヲ得ズ是レ
私立師範學校ノ望ヲ屬ス可カラザル所
以ニレテ既ニ已ニ不備ナルヲ豫知スレバ
豈之ヲ以テ官公立ト同一視スルヲ得ベケン
ヤ故ニ今回ノ改正案ニ於テハ官立公立ノ
四字ヲ加ヘタリ且現行法令ノ但書タルノ教員ニ
相應セル學カアル云々トアリ然ルニ其相應セ
ルト判定スルハ果シテ誰ノ職タルヲ詳ニセ
ス故ニ之ヲ改正シテ其義ヲ明ニセリ

削除案

- 第二十八條 公立小學校ヲ補助セヨカ爲メ文部
卿ヨリ毎年補助金ヲ各府縣ニ配付スヘシ
- 第二十九條 府知事縣令ハ文部卿ヨリ領取セ
ル補助金ヲ各公立小學校ニ配付スヘシ
- 第三十條 前年中授業四箇月ニ滿タザリシ小
學校ニハ補助金ヲ配付セサルヘシ
- 第三十一條 私立小學校タリト雖モ府知事縣
令ニ於テ其町村人民ハ公益タルコトヲ認ムル
トキハ補助金ヲ配付スルコトヲ得ヘシ
- 第三十二條 教員巡回ノ方法ヲ以テ教授セシム
ルコト一箇年四箇月以上ニ至ルノ町村ニハ補
助金ヲ配付スルコトヲ得ヘシ

第三十六條

公立師範學校ノ整備ヲ要セシカ

為ニ文部卿ヨリ補助金ヲ各府縣ニ配付スル

コトアルハシ

理由 文部省ニ於テ普通教育ヲ獎勵セシガ
為メ是レマデ年々定額ノ中ニ就キテ各地方
ニ補助金ヲ配付セリ而シテ其額年々
同一ナラズ其始メニ方リテ七拾萬圓ヲ出
セシテアリト雖モ本省ノ定額減少セルニ
隨ヒテ漸ク其數ヲ殺ギ十四年度ニ至リテハ
定額更ニ減ズルヲ以テ既ニ補助金ヲ出ス
ノ餘裕アルヲナシ蓋シ補助金ノ配付タル
普通教育ヲ必課スルノ制度ニ於テハ相伴
ヒテ必ズ無カル可カラザルモノトス何ント

ナレバ土地肥瘦ト人民ノ貧富トヲ問ハズ
兒童ノ就學學校ノ設立ヲ督促スル以上ハ
政府モ亦其幾分ヲ支出シテ以テ其力ヲ
助ケ其志ヲ勵マサル可カラザレバナリ
而シテ此補助金タル出ス所ヨリシテ之レ
ヲ見レバ巨額ナリト雖モ各地方ノ學校
ニ配付スルニ及ビテハ一校ノ得ル所僅ニ五
六圓ニ過ギズ然ラバ則チ之ヲ存スルト廢
スルト實際ニ於テ全ク影響ナキカ曰フ否
夫レ教育令ノ發行アリテヨリ政府ハ教
育ヲ督促セズシテ人民ノ自為ニ放任セリ
ト誤解セルモノ鮮カラズ則チ今更ノ改正
タル大ニ此頹勢ヲ挽回センガ為メ一層督

促ヲ嚴ニセルガ故ニ當從來ノ補助金ヲ廢
ス可カラザルノミナラズ更ニ幾分ヲ増加
シテ以テ此精神ヲ助ケザルヲ得ザル者ノ
如シ然リト雖モ從來ノ配付ハ實際ニ益ス
ルノ力甚ダ乏キヲ以テ更ニ此金額ヲ轉用
シ獎勵ノ方法ヲ變更セザル可カラズ然ルニ
事之ニ反シ一方ニ於テハ督促ヲ嚴ニシ一
方ニ於テハ單ニ補助金ヲ廢ス故ニ今回改
正案ヲ行ハント欲スルニ方リ此一事ニ至リ
テハ實ニ遺憾ナキ能ハザルナリ然ト雖モ
既ニ之ガ餘裕アル無ケレバ則チ之ヲ廢
セザルヲ得ズ故ニ是等數條ノ刪除ハ固
ヨリ其望ム所ニアラズ則チ已ムヲ得ガ

ルニ出ヅルノミ但別ニ督勵法ノ考案アル
アリト雖モ事施政ノ務メニ屬シ是等數
條刪除ノ理由ニ關セザルヲ以テ敢テ此ニ
贅セズ

追加案

第四十八條

町村立學校ノ教員ハ學務委員ノ申請ニ因リ府知事縣令之ヲ任免スヘシ

第四十九條

町村立小學校教員ノ俸額ハ府知事縣令之ヲ規定シテ文部卿ニ開申スヘシ

第五十條

品行不正ナルモノハ教員タルコトヲ得ス

理由

教育ノ目的ヲ達スルト否トハ實ニ教

員其人ヲ得ルト否トニ係リ教員其人ヲ

得ルト否トハ其待遇ノ厚キト否トニ由

ル學制ノ精神弛緩シテヨリ人民漸ク教

育ヲ輕視シ教員ノ學業居心如何ヲ問ハス

唯給料ノ寡キト其人ト爲リノ制ニ易キト

ヲ是レ視ルノミ夫レ重賞ノ下ニ能者出デ功
名ノ門ニ材者集マル今ヤ教員タル者ハ利
益ナリ又勢位ナシ此ノ如クニシテ材能ノ士
ヲ得テ教員タラシメントスルハ尚ホ木ニ縁
テ魚ヲ求ルガゴトキナリ故ニ有為ノ人ハ
教員トナルヲ屑トセス其一時教員ト為ル
者モ胸中自ラ平カナル能ハズ幾許ナラズ
シテ去テ他ニ之ク其循々トシテ職ヲ守ル
者ハ人者テ事ニ勝ヘザルモノ、如クス是ニ
於テカ教員ノ位地日ニ低下ニ趣キ學事
漸ク荒ニ學校ノ信用日ニ衰フ其弊亦極マ
ルト謂フベキナリ是レ此等ノ三條ヲ追加
スル所以ニシテ其府知事縣令ヲシテ此ヲ

任免セシムルハ其職ヲ重ナルニ在テ其俸
額ヲ規定セシムルハ妄ニ其給料ヲ減少セ
ザラシムルナリ而シテ教員ノ職任重ク給
料モ亦其職ニ應ズル以上ハ隨テ之ヲ責ルモ
亦嚴ナラザル可ラズ是レ品行正シカラザ
ルモノヲシテ教員ノ名ヲ冒カサシムルハ法
律ニ於テ禁ズルヲ明示スル所以ナリ

第五十一條 各府縣ハ土地ノ情況ニ隨ヒ中學校
ヲ設置シ又專門學校職工學校等ヲ設置ス
ヘシ

理由 各府縣大抵中學校等ノ設ケアラザ
ルハナシ而シテ府縣會起リテヨリ往々之
ヲ無用視シ動モスレハ廢止セントスルニ傾

クノ勢アリ公平ノ眼光ヲ放ツテ之ヲ觀ル
ニ地方ノ中學校等現時悉ク整備シテ又
議スベキモノナレト謂フベカラスト雖モ之
ヲ改良スルヲ勉メズ中道ニレテ廢止ス
ルハ特ニ學事ノ退歩ヲ促スノミナラズ其
土地人民ノ損失モ亦細ナラズト謂フベシ
蓋シ各地方ニ於テ學齡兒童普通學科ヲ
卒業スルノ後更ニ高等ノ學科ヲ修メント
欲スル者アルモ若シ此等學校ノ設置アラ
ザルトキハ更ニ進ンデ高上ノ學ニ就クノ道ナ
ク已ムヲ得ズ速ク彼ヲ負フテ都下ニ遊ン
トスレバ舊地ニ在テ學ブニ比スルニ其
費耗スル所ハ往々之ニ倍セントス況ヤ

既ニ設立セル學校ニレテ俄然トシテ之ヲ廢
止スレバ曩ニ注入セル所ノ資本ハ一朝徒
費ニ歸シテ止マントスルニ於テヲヤ是レ今
回本條ヲ設ケテ豫メ其損害ヲ未然ニ
杜ガント欲スル所以ナリ然リト雖モ今日
ニ當リ其未ダ中學ノ設ケナキ地方ニ向テ
強ヒテ之ヲ課セザル可カラザルモノトスルニ
ハアラズ是レ即チ土地ノ情況ニ隨ヒ云々
ト注意ノ言アル所以ナリ

教
育
令

文
部
省



教育令

明治二十九年九月
二十日頒布

教育令

第一條 全國ノ教育事務ハ文部卿之ヲ統
攝ス故ニ學校幼稚園書籍館等ハ公立私
立ノ別ナク皆文部卿ノ監督内ニアルヘ
シ

第二條 學校ハ小學校中學校大學校師範
學校專門學校^{職業學校}其他各種ノ學校トス

第三條 小學校ハ普通ノ教育ヲ兒童ニ授
クル所ニシテ其學科ヲ讀書習字算術地
理歴史脩身等ノ初步トス土地ノ情況ニ

隨ヒテ野畫唱歌體操等ヲ加ヘ又物理生
理博物等ノ大意ヲ加フ殊ニ女子ノ爲ニ

ハ裁縫等ノ科ヲ設クヘシ
但已ハ得サル場合ニ於テハ讀書習字算術地理歴史修身中地理歴史裁縫ナルコトヲ得

第四條 中學校ハ高等ナル普通學科ヲ授
クル所トス

第五條 大學校ハ法學理學醫學文學等ノ
專門諸科ヲ授クル所トス

第六條 師範學校ハ教員ヲ養成スル所ト
ス

第七條 專門學校ハ專門一科ノ學術ヲ授

クル所トス

第八條 以上掲クル所何ノ學校ヲ論セス
職工學校ハ諸般ノ工藝ヲ授クル所トス

第九條 各町村ハ府知事縣令ノ指示ニ從ヒ獨立或ハ聯合シテ學科設置スルニ
各町村ハ府知事縣令ノ指示ニ從ヒ獨立或ハ聯合シテ學科設置スルニ
足ルキ箇所ハ數箇ノ小學校ヲ設置スヘシ

村聯合ニテ公立小學校ヲ設置スヘシ
但町村人民ノ公益ヲテ府知事縣令ノ認可ヲ經タルトキハ別ニ設
置セサルモ妨ケナシ

校ヲルトキハ別ニ公立小學校ヲ設置
セサルモ妨ケナシ

第十條 各町村内ノ學校事務ヲ設置スル獨立或ハ聯合ノ區
域ニ力爲シ學務委員ヲ置キ校長ヲ以テ其員ニ加フヘシ

但人員ノ多寡給料ノ有無ハ其町村ノ評決

適宜タルルヘシ

第十一條 學務委員ハ其町村人民

タリ三倍ヲ薦舉シ府知事縣令其中ニ就テ之ヲ選任スヘシ

第十二條 學務委員ハ府知事縣令ノ監督

ニ屬シ兒童ノ就學學校ノ設置保護等ノ事ヲ掌ルヘシ

第十三條 凡兒童六年ヨリ十四年ニ至ル

八箇年ヲ以テ學齡トス

第十四條 凡兒童學齡間少

月ハ普通教育ヲ受タヘシ

第十五條 學齡兒童ノ就學セシムルハ父

母及後見人等ノ責任タルヘシ

但事故アリテ就學セシムルモ

其事由ヲ學務委員ニ陳述スヘシ

第十六條 公立小學校ニ於テハ八箇年

以テ學期トス地ノ便宜ニ因リ此

學期ヲ縮ムルヨリ得ヘシ

年ヨリ短クスルヲ不此四箇年間ハ每

年授業スルヨリ必四箇月以上タルヘシ

但授業時間ハ一日三時ヨリ少カラズ六時ヨリ多カラサルモトス

第十七條

學校ニ入ルモノハ郡區長ノ認可ヲ得ヘシ
唯モ別ニ普通

教育ヲ受ケントスルモノハ郡區長ノ認可ヲ得ヘシ
又ハ郡區長ハ兒童ノ學業ヲ其町村ノ小學校ニテ試驗セシムヘシ

第十八條

學校ヲ設置スルノ資力ニ乏シシ

地方ニ於テハ教員巡回ノ方法ヲ設ケ
又ハ兒童ヲ教授セシムルコトヲ得ヘシ

第十九條

學校ニ公立私立ノ別アリ地方

稅若クハ町村ノ公費ヲ以テ設置セルモ

ノヲ公立學校トシ一人若クハ數人ノ私

費ヲ以テ設置セルモノヲ私立學校トス

第二十條

公立學校ノ設置或ハ廢止セシム

トハ文部省ノ認可ヲ經ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經

ヘシ

第二十一條

私立學校ノ設置或ハ廢止

ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經

第二十二條

公立學校ノ教則ハ文部省ノ認可ヲ經

ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經

第二十三條

私立學校ノ教則ハ府知事縣令ノ認可ヲ經

ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經

第二十四條

公立學校ノ費用府縣會ノ議

定ニ係レルモノハ地方税ヨリ支辨シ町
村人民ノ協議ニ係レルモノハ町村費ヨ
リ支辨スヘシ

第二十五條 町村費ヲ以テ設置保護スル
學校ニ於テ補助ヲ地方税ニ要スルトキ
ハ府縣會ノ議定ヲ經テ之ヲ施行スルコ
トヲ得ヘシ

第二十六條 公立學校ノ土地ハ免税タル
ヘシ

第二十七條 凡學事ニ供スル寄附金等ハ

其寄附人ヨリ指定セシ目途ノ外ニ支消
スルコトヲ得ス

第二十八條 公立小學校ヲ補助セシカ爲
ニ文部卿ヨリ毎年補助金ヲ各府縣ニ配
付スヘシ

第二十九條 府知事縣令ハ文部卿ヨリ領
取セシ補助金ヲ各公立小學校ニ配付ス
ヘシ

第三十條 前年中授業四箇月ニ滿タサリ
シ小學校ニハ補助金ヲ配付セサルヘシ

第三十一條 私立小學校タリト雖モ府知
 事縣令ニ於テ其町村人民ノ公益タルコ
 トヲ認ムルトモ補助金ヲ配付スルコ
 トヲ得ヘシ

第三十二條 教員巡回ノ方法ヲ以テ教授
 セシムルコト一箇年四箇月以上ニ至ル
 メ町村ニ入補助金ヲ配付スルコトヲ得
 ヘシ

第三十三條 各府縣ハ小學校教員ヲ養成セシムルニ於テハ便宜ニ隨ヒ
 テ公立師範學校ヲ設置スヘシ

第三十四條 公立師範學校ニ於テハ本校
 卒業ノ生徒ニ試験ノ後卒業證書ヲ與フ
 ヘシ

第三十五條 公立師範學校ハ本校ニ入學
 セサルモノト雖モ卒業證書ヲ請フモノ
 アラハ其學業ヲ試験シ合格ノモノニハ
 卒業證書ヲ與フヘシ

第三十六條 公立師範學校ハ整備ヲ要セ
 ンカ爲メ文部卿ヨリ補助金ヲ各府縣ニ
 配付スルコトアルヘシ

第三十七條 教員ハ男女ノ別ナク年齢十八年以上タルヘシ

第三十八條 公立小學校教員ハ（官立公立）師範學校ノ卒業證書ヲ得有タルモノトス

但（本文）師範學校ノ卒業證書ヲ得有スト雖モ（附知事縣令ヨリ教員免許狀ヲ得タルモノハ其府縣ニ於テハ）教員立相應セル學力ヲ有スルモメハ

○教員タルモ妨ケナシ

第三十九條 文部卿ハ時々吏員ヲ府縣ニ發遣シ學事ノ實況ヲ巡視セシムヘシ

第四十條 公私學校ニ於テハ文部卿ヨリ

發遣セル吏員ノ巡視ヲ拒ムコトヲ得ス

第四十一條 府知事縣令ハ管内學事ノ實狀ヲ記載シテ毎年文部卿ニ申報スヘシ

第四十二條 凡學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルコトヲ得ス

但小學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルモ妨ケナシ

第四十三條 凡學校ニ於テ授業料ヲ收ムルト收メサルトハ其便宜ニ任スヘシ

第四十四條 凡兒童ハ種痘或ハ天然痘ヲ

歴タルモノニ非サレハ入學スルコトヲ得ス

第四十五條 傳染病ニ罹ルモノハ學校ニ出入スルコトヲ得ス

第四十六條 凡學校ニ於テハ生徒ニ體罰ス毆ルチノ或類ハ縛ヲ加フヘカラス

第四十七條 生徒試験ノトキハ父母或ハ後見人等其學校ニ來觀スルコトヲ得ヘシ

追加

第四十八條 町村立學校ノ教員ハ學務委員ノ申請ニ因リ府知事縣令之ヲ任免スヘシ

第四十九條 町村立小學校教員ノ俸額ハ府知事縣令之ヲ規定シニ文部卿ニ關申スヘシ

第五十條 品行不正ナルモノハ教員タルコトヲ得ス

第五十一條 各府縣ハ土地ノ情況ニ隨ヒ中學校ヲ設置シ又專門學校職工學校等ヲ設置スヘシ



文部省伺教育令改正之事

右謹テ裁可ヲ仰ク

明治十三年十二月十五日

太政大臣三條實美



左大臣熾仁親王



右大臣岩倉具視



參議大隈重信



大正官

参議 大木喬任

参議 山縣有朋

参議 伊藤博文

参議 黒田清隆

参議 西郷従道

参議 川村純義

参議 井上馨

参議 山田顯義

文甲三〇号

明治十三年十二月十一日

大臣 

内閣書記官 

文部省上申教育令改正之事
内務法制西部勘査進呈ス
依テ回議ニ供ス

参議









明治十三年十二月九日

内務部参議

書記官

主査

法制部参議

書記官

別紙文部省上申教育令改正ノ儀ハ上申通
以裁可相成可然候尤モ現行教育令第二十
六條ニ公立學校ノ土地ハ免稅タルヘシトアリ學
校ニ屬スルノ土地ハ皆ナ免稅タルモノ、如ク其免

税スヘキ地ノ区分明瞭ナラ候間之ヲ敷地ト改メ候方可然
同省上申ノ体裁ニヨルトキハ方新旧錯雜官民ノ不便
少ナカラス因テ各條ヲ整理シ別紙ノ通布告相成可
然哉仰高裁候也

文即布告案案（附案）通

別紙ノ通

元老院へ議定

例文

布告案

第 號

明治十二年^{九月}第四拾號布告教育令左
ノ通改正候條此旨布告候事

明治十三年 月 日

第一條 全國ノ教育事務ハ文部卿之ヲ統攝ス故ニ學校幼稚園書籍館等ハ公立私立ノ別ナク皆文部卿ノ監督内ニアルヘシ

第二條 學校、小學校、中學校、大學校、師範學校、專門學校、**職工學校**、其他各種ノ學校トス。

第三條 小學校ハ普通ノ教育ヲ兒童ニ授クル所
ニシテ其學科ヲ讀書習字算術地理歴史修身
等ノ初步トス土地ノ情況ニ隨ヒテ卦畫唱歌
體操等ヲ加ヘ又物理生理博物等ノ大意ヲ加フ

殊ニ女子ノ為ニ裁縫等ノ科ヲ設クヘシ

但已ムヲ得ガル場合ニ於テハ讀書習字算術

地理歴史修身ノ中地理歴史ヲ減スルコトヲ得

第四條 中學校ハ高等ナル普通學科ヲ授クル所トス

第五條 大學校ハ法學理學醫學文學等ノ專門諸科ヲ授クル所トス

第六條 師範學校ハ教員ヲ養成スル所トス

第七條 專門學校ハ專門一科ノ學術ヲ授クル

所トス

第八條 職工學校ハ諸般ノ工藝ヲ授クル所トス
以上數條掲クル所何ノ學校ヲ論セス各人皆之ヲ設置スルコトヲ得ヘシ

第九條 各町村ハ府知事縣令ノ指示ニ従ヒ獨立
或ハ聯合シテ其學齡兒童ヲ教育スルニ足ルベキ一箇若クハ數箇ノ小學校ヲ設置スヘシ

但本文小學校ニ代ルヘキ私立小學校アリテ府知事縣令ヲ認可ヲ經タルトキハ別ニ設置セサルモ妨ゲナシ

第十條

各町村ハ學務ヲ幹理セシメンカ爲ニ學校ヲ設置スル獨立或ハ聯合ノ區域ニ學務委員ヲ置キ戸長ヲ以テ其員ニ加フヘシ

但人員ノ多寡給料ノ有無及其額ハ區町村會之ヲ許決シ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第十一條

學務委員ハ町村人民其定員ノ二倍若クハ三倍ヲ薦舉シ府知事縣令其中ニ就テ之ヲ選任スヘシ

但薦舉ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第十二條

學務委員ハ府知事縣令ノ監督ニ屬シ兒童ノ就學學校ノ設置保護等ノ事ヲ掌ルヘシ

第十三條

凡兒童六年ヨリ十四年ニ至ル八箇年ヲ以テ學齡トス

第十四條

學齡兒童ヲ就學セシムルハ父母後見人等ノ責任タルヘシ

第十五條

父母後見人等ハ其學齡兒童ノ小學校三箇年ノ課程ヲ卒ラサル間已ムヲ得サル事故アルニアラサレハ少クトモ毎年十六週日以上就學セシメ

サルヘカラス又小學校三箇年ノ課程ヲ卒リタル後
ト雖モ相當ノ理由アルニアラサレハ毎年就學セシメサ
ルヘカラス

但就學督責ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シ
テ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第十六條 小學校ノ學期ハ三箇年以上八箇年以下

タルヘク授業日數ハ毎年三十二週日以上タルヘシ

但授業時間ハ一日三時ヨリ少カラス六時ヨリ多

カラサルモノトス

第十七條 學齡兒童ヲ學校ニ入レス又巡回授業ニ

依ラスレテ別ニ普通教育ヲ授ケントスルモノハ郡區
長ノ認可ヲ經ヘシ

但郡區長ハ兒童ノ學業ヲ其所村ノ小學校ニ
於テ試驗セシムヘシ

第十八條 小學校ヲ設置スルノ資力ニ乏シクシテ巡回

授業ノ方法ヲ設ケ普通教育ヲ兒童ニ授ケントス

ル所村ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第十九條 學校ニ公立私立ノ別アリ地方稅若クハ

町村ノ公費ヲ以テ設置セルモノヲ公立學校トシ一人

若クハ數人ノ私費ヲ以テ設置セルモノヲ私立學校

トス

第二十條

公立學校幼稚園書籍館等ノ設置
廢止其府縣立ニ係ルモノハ文部卿ノ認可ヲ經
ヘク其町村立ニ係ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經
ヘシ

第二十一條

私立學校幼稚園書籍館等ノ設置
ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘク其廢止ハ府知
事縣令ニ開申スヘシ

但公立小學校ニ代用スル私立小學校ノ廢止ハ
府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第二十二條

町村立私立學校幼稚園書籍館等
設置廢止ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文
部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第二十三條

小學校ノ教則ハ文部卿頒布スル所ノ
綱領ニ基キ府知事縣令土地ノ情況ヲ量リテ
之ヲ編制シ文部卿ノ認可ヲ經テ管内ニ施行
スヘシ

但府知事縣令施行スル所ノ教則ニ準據シ
難キ場合アリテ之ヲ斟酌増減セントシ府知
事縣令之ヲ許可セントスルトキハ其意見ヲ付シ

テ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第二十四條 公立學校ノ費用府縣會ノ議定ニ係
レルモノハ地方税ヨリ支辨シ町村人民ノ協議ニ
係レルモノハ町村費ヨリ支辨スヘシ

第二十五條 町村費ヲ以テ設置保護スル學校ニ於テ
補助ヲ地方税ニ要スルトキハ府縣會ノ議定ヲ
經テ之ヲ施行スルコトヲ得ヘシ

第二十六條 公立學校ノ敷地ハ免稅タルヘシ

第二十七條 凡學事ニ供スル寄附金等ハ其寄附
人ヨリ指定セシ用途ノ外ニ支消スルコトヲ得ス

第二十八條 公立小學校ヲ補助セシカ為ニ文部卿
ヨリ毎年補助金ヲ各府縣ニ配付スヘシ

第二十九條 府知事縣令ハ文部卿ヨリ領取セシ補
助金ヲ各公立小學校ニ配付スヘシ

第三十條 前年中授業四箇月ニ滿タザリシ小學
校ニハ補助金ヲ配付セサルヘシ

第三十一條 私立小學校タリト雖モ府知事縣令ニ於
テ其所村人民ノ公益タルコトヲ認ムルトキハ補助金
ヲ配付スルコトヲ得ヘシ

第三十二條 教員巡回ノ方法ヲ以テ教授セシムルコト

一箇年四箇月以上ニ至ルハ町村ニハ補助金ヲ配
付スルコトヲ得ヘシ

第三十三條 各府縣ハ小學校教員ヲ養成セシカ為
ニ師範學校ヲ設置スヘシ

第三十四條 公立師範學校ニ於テハ本校卒業ノ生
徒ニ試験ノ後卒業證書ヲ與フヘシ

第三十五條 公立師範學校ハ本校ニ入學セサルモノト
雖モ卒業證書ヲ請フモノアラハ其學業ヲ試験シ
合格ノモノニハ卒業證書ヲ與フヘシ

第三十六條 公立師範學校ハ整備ヲ要セシカ為ニ

文部卿ヨリ補助金ヲ各府縣ニ配付スルコトナルハ

第三十七條 教員ハ男女ノ別ナク年齡十八年以上タル

第三十八條 小學校教員ハ官立公立師範學校ノ

卒業證書ヲ有スルモノトス

但本文師範學校ノ卒業證書ヲ有セスト雖モ府
知事縣令ヨリ教員免許狀ヲ得タルモノハ其府
縣ニ於テ教員タルモ妨ケナシ

第三十九條 文部卿ハ時々吏員ヲ府縣ニ發遣シ學

事ノ實況ヲ巡視セシムヘシ

第四十條 公私學校ニ於テハ文部卿ヨリ發遣セル
吏員ノ巡視ヲ拒ムコトヲ得ス

第四十一條 府知事縣令ハ管内學事ノ實狀ヲ記載
シテ毎年文部卿ニ申報スヘシ

第四十二條 凡學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルコト
ヲ得ス

但小學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルモ妨ケナシ
第四十三條 凡學校ニ於テ授業料ヲ收ムルト收メサル
トハ其便宜ニ任スヘシ

第四十四條 凡兒童ハ種痘或ハ天然痘ヲ歴タルモノニ
非サレハ入學スルコトヲ得ス

第四十五條 傳染病ニ罹ルモノハ學校ニ出入スルコトヲ
得ス

第四十六條 凡學校ニ於テハ生徒ニ體罰
ヲ加フヘカラス 毆打或ハ縛
スルノ類

第四十七條 生徒試験ノトキハ父母或ハ後見人等其
學校ニ來觀スルコトヲ得ヘシ

第四十八條 町村立學校ノ教員ハ學務委員ノ申
請ニ因リ府知事縣令之ヲ任免スヘシ

第四十九條 町村立小學校教員ノ俸額ハ府知事
縣令之ヲ規定シテ文部卿ニ開申スヘシ

第五十條 品行不正ナルモノハ教員タルコトヲ得ス

第五十一條 各府縣ハ土地ノ情況ニ隨ヒ中學校ヲ
設置シ又專門學校職工學校等ヲ設置スヘシ

教育令改正布告案

右其院議定ニ被付候事

明治三十三年十二月十八日

太政大臣

議長 大木喬任殿





文部權大書記官島田三郎

文部少書記官久保田讓

右教育令改正布告案議定之即內閣委員ト被
差遣候條此旨相達候事

明治十三年三月十八日 太政大臣

議長大木喬任殿

過日 文部卿ヨリ上奏お成候教育令改正按法
裁定ノ上奉日元老院議定ニ被付候由就テハ
内閣ニ於テ法取捨お成候康等有之候ハ其箇
所為心得法回示置お成候様致度此段及法依
頼候也

明治十三年十二月十八日

久保田文部少書記官

島田文部權大書記官

内閣書記官

法中

[Faint vertical text in the right-hand column, mostly illegible due to fading.]

能所改訂
教育令改正布告案第一讀會明後廿二日午前第九時三十分相開及此及及
去屆也

明治三十三年十二月廿日 議長大木喬任

太政大臣三條實美殿

内閣事務通知
田島嘉久

陽明先生年譜
卷之六

二日午前奉大朝三十分時開光武廟公
燒香令道士等去上香一盞會同道士

第 五

一般元老院ノ議定ニ付テハ其教育令改正案ノ
 儀ニ付テハ其旨ノ趣旨ハ其旨ニ付テハ其旨ニ付
 通心裁定おしむ儀ニ付テハ其旨ニ付テハ其旨
 「公立学校ノ土地ハ免脱タルトスルモ其旨ニ付
 土地ハ却テ免脱タルモノ、如ク其旨ニ付テハ其旨
 「公立学校ノ土地ハ免脱タルモノ、如ク其旨ニ付
 外ニ付テハ其旨ニ付テハ其旨ニ付テハ其旨ニ付

明倫彙編 家範典 卷一百一十五

追テ所有の中ノ御裁ニテ布告せられテハ臣民ノ
 不便不少ナリ別所ノ御裁ニ改定せられ玉ヘ左
 條ヲ之方加ル次暫ク議定セ改定し得ルノ般
 議定ノ事モ條々ニ即テ改正ノ為條々限リ儀ト
 心得ルモノハ此方御裁也

明弘治十二年秋茅以居歸市無教育令及一通
改正以懷安布告此事

第一條
第二條
第三條

乾貳百拾七號

本月十八日議定ニ被付候教育令改正布告案
昨廿三日會議ニ於テ修正ヲ加フヘキニ決シ別冊
修正案

勅裁ヲ仰キ候為メ御上奏有之度候右ハ修正
セシ所以ノ理由ヲ具シテ上奏可致筈ニ候得共至
急ヲ要スルノ際時日ヲ費サンコトヲ恐レ豫テ内
閣委員文部權大書記官島田三郎致照會置候ニ
付御質問ノ廉モ候ハ同委員ハ御打合有之
度此段副テ申進候也

明治十三年十二月廿四日 議長大木喬任

太政大臣三條實美殿

本月十八日下付セラレシ所ノ教育令改正布
告案昨廿三日會議ニ於テ別冊ノ如ク修正
ヲ加フヘキニ決ス因テ其修正ノ條項ヲ監書
シテ謹テ之ヲ上奏ス

明治十三年十二月廿四日 議長大木喬任



元老院

布告案

明治十二年九月第四拾號布告教育令左ノ通改正候條此旨布告候事

第一條 全國ノ教育事務ハ文部卿之ヲ統攝ス故ニ學校幼稚園書籍館
等ハ公立私立ノ別ナク皆文部卿ノ監督内ニアルヘシ

第二條 學校ハ小學校中學校大學校師範學校專門學校^{工學校}其他
各種ノ學校トス

第三條 小學校ハ普通ノ教育ヲ兒童ニ授クル所ニシテ其學科ヲ讀書
習字算術地理歴史修身等ノ初步トス土地ノ情況ニ隨ヒテ昇降唱歌
體操等ヲ加ヘ又物理生理博物等ノ大意ヲ加フ殊ニ女子ノ爲ニハ裁
縫等ノ科ヲ設クヘシ

但シ^ハ得サル場合ニ於テハ讀書習字算術^{地理歴史}修身等ノ中地
理歴史ヲ減ズルコトヲ得

第四條 中學校ハ高等ナル普通學科ヲ授クル所トス

第五條 大學校ハ法學理學醫學文學等ノ專門諸科ヲ授クル所トス

第六條 師範學校ハ教員ヲ養成スル所トス

第七條 專門學校ハ專門一科ノ學術ヲ授クル所トス

第八條 農業學校ハ農科ノ學業ヲ授クル所トス
商業學校ハ商賣ノ學業ヲ授クル所トス
職業學校ハ百工ノ職業ヲ授クル所トス

以上數條掲クル所何ノ學校ヲ論セス各人皆之ヲ設置スルコトヲ得

ハシ

第九條 各町村ハ府知事縣令ノ指示ニ從ヒ獨立或ハ聯合シテ其學齡

兒童ヲ教育スルニ足ルベキ一箇若クハ數箇ノ小學校ヲ設置スヘシ

但來文小學校ニ代ルベキハ府知事縣令ノ認可ヲ得

經タルトキハ別ニ設置スルベシ

第十條 各町村ハ學務ヲ幹理シシメシカ爲ニ小學校ヲ設置スル獨立

或ハ聯合ノ區域ニ學務委員ヲ置キ戸長ヲ以テ其員ニ加フヘシ

但人員ノ多寡給料ノ有無及其額ハ區町村會之ヲ評決シ府知事縣

令ノ認可ヲ經ヘシ

第十一條 學務委員ハ町村人民其定員ノ二倍若クハ三倍ヲ薦舉シ府

知事縣令其中ニ就テ之ヲ撰任スヘシ

但薦舉ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第十二條 學務委員ハ府知事縣令ノ監督ニ屬シ兒童ノ就學學校ノ設

置保護等ノ事ヲ掌ルヘシ

第十三條 凡兒童六年ヨリ十四年ニ至ル八箇年ヲ以テ學齡トス

第十四條 學齡兒童ヲ就學セシムルハ父母後見人等ノ責任タルヘシ

第十五條 父母後見人等ハ其學齡兒童ノ小學科三箇年ノ課程ヲ卒ラサル間已ムヲ得サル事故アルニアラサレハ少クとも毎年十六週日以上就學セシメサルヘカラス又小學科三箇年ノ課程ヲ卒リタル後ト雖モ相當ノ理由アルニアラサレハ毎年就學セシメサルヘカラス但就學督責ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第十六條 小學校ノ學期ハ三箇年以上八箇年以下タルヘク授業日數ハ毎年三十二週日以上タルヘシ

但授業時間ハ一日三時ヨリ少カラス六時ヨリ多カリサルモノトス

第十七條 學齡兒童ヲ學校ニ入レス又巡回授業ニ依ラスシテ別ニ普通教育ヲ授ケントスルモノハ郡區長ノ認可ヲ經ヘシ

但郡區長ハ兒童ノ學業ヲ其町村ノ小學校ニ於テ試験セシムヘシ

第十八條 小學校ヲ設置スルノ資力ニ乏シクシテ巡回授業ノ方法ヲ

設ケ普通教育ヲ兒童ニ授ケントスル町村ハ府知事縣令ノ認可ヲ經

ルモノトス

第十九條 學校ニ公立私立ノ別アリ地方税若クハ町村ノ公費ヲ以テ

設置セルモノヲ公立學校トシ一人若クハ數人ノ私費ヲ以テ設置セ

ルモノヲ私立學校トス

第二十條 公立學校幼稚園書籍館等ノ設置廢止其府縣立ニ係ルモノハ文部卿ノ認可ヲ經ヘク其町村立ニ係ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第二十一條 私立學校幼稚園圖書館等ノ設置ハ府知事縣令ノ認可ヲ
經ヘク其廢止ハ府知事縣令ニ開申スヘシ

但公立小學校ニ代用スル私立小學校ノ廢止ハ府知事縣令ノ認可
ヲ經ヘシ

第二十二條 町村立私立學校幼稚園圖書館等設置廢止ノ規則ハ府知
事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第二十三條 小學校ノ教則ハ文部卿頒布スル所ノ綱領ニ基キ府知事
縣令土地ノ情況ヲ量リテ之ヲ編制シ文部卿ノ認可ヲ經テ管内ニ施
行スヘシ

但府知事縣令施行スル所ノ教則ニ準據シ難キ場合アリテ之ヲ斟酌
酌増減セントシ府知事縣令之ヲ許可セントスルトキハ其意見ヲ

付シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第二十四條 公立學校ノ費用府縣會ノ議定ニ係レルモノハ地方稅ヨ
リ支辨シ町村人民ノ協議ニ係レルモノハ町村費ヨリ支辨スヘシ

第二十五條 町村費ヲ以テ設置保護スル學校ニ於テ補助ヲ地方稅ニ
要スルトキハ府縣會ノ議定ヲ經テ之ヲ施行スルコトヲ得ヘシ

第二十六條 公立學校ノ敷地ハ免稅タルヘシ

第二十七條 凡學事ニ供スル寄附金等ハ其寄附人ヨリ指定セシ目途
ノ外ニ支消スルコトヲ得ス

第二十八條 ~~削除~~

第二十九條 ~~削除~~

第三十條 ~~削除~~

第三十一條 ~~削除~~

第三十二條 ~~削除~~

第三十三條 各府縣ハ小學校教員ノ養成センカ爲ニ師範學校ヲ設置スヘシ

第三十四條 公立師範學校ニ於テハ本校卒業ノ生徒ニ試験ノ後卒業證書ヲ與フヘシ

第三十五條 公立師範學校ハ本校ニ入學セサルモノト雖モ卒業證書ヲ請フモノアラハ其學業ヲ試験シ合格ノモノニハ卒業證書ヲ與フヘシ

第三十六條 ~~削除~~

第三十七條 教員ハ男女ノ別ナク年齡十八年以上タルヘシ
但品行不正ナルモノハ教員タルコトヲ得ス

第三十八條 小學校教員ハ官立公立師範學校ノ卒業證書ヲ有スルモノトス

但本文師範學校ノ卒業證書ヲ有セスト雖モ府知事縣令ヨリ教員免許狀ヲ得タルモノハ其府縣ニ於テ教員タルモ妨ケナシ

第三十九條 文部卿ハ時々吏員ヲ府縣ニ發遣シ學事ノ實況ヲ巡視セシムヘシ

第四十條 公私學校ニ於テハ文部卿ヨリ發遣セル吏員ノ巡視ヲ拒ムコトヲ得ス

第四十一條 府知事縣令ハ管内學事ノ實狀ヲ記載シテ毎年文部卿ニ申報スヘシ

第四十二條 凡學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルコトヲ得ス

但小學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルモ妨ケナシ

第四十三條 凡學校ニ於テ授業料ヲ收ムルト收メサルトハ其便宜ニ任スヘシ

第四十四條 凡兒童ハ種痘或ハ天然痘ヲ歴タルモノニアラサレハ入學スルコトヲ得ス

第四十五條 傳染病ニ罹ルモノハ學校ニ出入スルコトヲ得ス

第四十六條 凡學校ニ於テハ生徒ニ體罰（或ハ縛ヲ加フヘカラス）スルノ類

第四十七條 生徒試験ノトキハ父母或ハ後見人等其學校ニ來觀スルコトヲ得ヘシ

第四十八條 町村立學校ノ教員ハ學務委員ノ申請ニ因リ府知事縣令ノ任免スヘシ

第四十九條 町村立小學校教員ノ俸給ハ府知事縣令之ヲ規定シテ之ヲ給スルコトヲ得ヘシ

第五十條 品行不正ナルモノハ教員タルコトヲ得ス

第五十一條 各府縣ハ土地ノ情況ニ隨ヒ中學校ヲ設置シ又專門學校（農學校商學校）ヲ設置スヘシ

元老院上奏教育令改正布告案修正議定
之事

右謹テ奏ス

明治十三年十二月廿五日

太政大臣三條實美



左大臣熾仁親王



右大臣岩倉具視



大正

参議 大隈重信



参議 大木喬任



参議 山縣有朋



参議 伊藤博文



参議 西郷従道



参議 川村純義



参議 井上馨



参議 山田顯義



文甲三〇号

聞

明治十三年十二月廿四日

大臣



内閣書記官



元光院上奏教育令改正布告案修正
議定之事

参議



録

明治十三年十二月廿四日

内務部参議



書記官



法制部参議



書記官



別紙文部省上申教育令改正布告案本月十八日
元老院ノ議定ニ付セラレ候處別紙ノ通修正
ノ上議決ノ趣上申相成則チ審按候處穩當ノ
修正ニシテ不都合ノ虞無之相考候間御裁可

相成可然裁仰高裁候也

御布告按

元老院議定上奏成案、通

御指令按

上申、趣元老院議定、上第、号、以、布告

候事 明治十三年十二月二十八日

第五拾九號

明治十二年九月第四拾號布告教育令左ノ通改正候條此旨布告候事

明治十三年十二月二十八日

太政大臣三條實美

第一條 全國ノ教育事務ハ文部卿之ヲ統攝ス故ニ學校幼稚園書籍館等ハ公立私立ノ別ナク皆文部卿ノ監督内ニアルヘシ

第二條 學校ハ小學校中學校大學校師範學校專門學校農學校商業學校職工學校其他各種ノ學校トス

第三條 小學校ハ普通ノ教育ヲ兒童ニ授クル所ニシテ其學科ヲ修身讀書習字算術地理歴史等ノ初步トス土地ノ情況ニ隨ヒテ野詠唱歌體操等ヲ加ヘ又物理生理博物等ノ大意ヲ加フ殊ニ女子ノ爲ニハ裁縫等ノ科ヲ設クヘシ

但已ムヲ得サル場合ニ於テハ修身讀書習字算術地理歴史ノ中地理歴史ヲ減スルコトヲ得

第四條 中學校ハ高等ナル普通學科ヲ授クル所トス

第五條 大學校ハ法學理學醫學文學等ノ專門諸科ヲ授クル所トス

第六條 師範學校ハ教員ヲ養成スル所トス

第七條 專門學校ハ專門一科ノ學術ヲ授クル所トス

第八條 農學校ハ農耕ノ學業ヲ授クル所トス
商業學校ハ商賣ノ學業ヲ授クル所トス
職工學校ハ百工ノ職藝ヲ授クル所トス

以上數條掲クル所何ノ學校ヲ論セス各人皆之ヲ設置スルコトヲ得
ヘシ

第九條 各町村ハ府知事縣令ノ指示ニ從ヒ獨立或ハ聯合シテ其學齡
兒童ヲ教育スルニ足ルヘキ一箇若クハ數箇ノ小學校ヲ設置スヘシ
但本文小學校ニ代ルヘキ私立小學校アリテ府知事縣令ノ認可ヲ

經タルトキハ別ニ設置セサルモ妨ケナシ

第十條 各町村ハ學務ヲ幹理セシメンカ爲ニ小學校ヲ設置スル獨立
或ハ聯合ノ區域ニ學務委員ヲ置キ戸長ヲ以テ其員ニ加フヘシ

但人員ノ多寡給料ノ有無及其額ハ區町村會之ヲ評決シ府知事縣
令ノ認可ヲ經ヘシ

第十一條 學務委員ハ町村人民其定員ノ二倍若クハ三倍ヲ薦舉シ府
知事縣令其中ニ就テ之ヲ撰任スヘシ

但薦舉ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ
第十二條 學務委員ハ府知事縣令ノ監督ニ屬シ兒童ノ就學學校ノ設
置保護等ノ事ヲ掌ルヘシ

第十三條 凡兒童六年ヨリ十四年ニ至ル八箇年ヲ以テ學齡トス

第十四條 學齡兒童ヲ就學セシムルハ父母後見人等ノ責任タルヘシ
 第十五條 父母後見人等ハ其學齡兒童ノ小學科三箇年ノ課程ヲ卒ラサル間已ムヲ得サル事故アルニアラサレハ少クトモ毎年十六週日以上就學セシメサルヘカラス又小學科三箇年ノ課程ヲ卒リタル後ト雖モ相當ノ理由アルニアラサレハ毎年就學セシメサルヘカラス但就學督責ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第十六條 小學校ノ學期ハ三箇年以上八箇年以下タルヘク授業日數ハ毎年三十二週日以上タルヘシ
 但授業時間ハ一日三時ヨリ少カラス六時ヨリ多カラサルモノトス

第十七條 學齡兒童ヲ學校ニ入レス又巡回授業ニ依ラスシテ別ニ普通教育ヲ授ケントスルモノハ郡區長ノ認可ヲ經ヘシ

但郡區長ハ兒童ノ學業ヲ其町村ノ小學校ニ於テ試験セシムヘシ
 第十八條 小學校ヲ設置スルノ資力ニ乏シクシテ巡回授業ノ方法ヲ設ケ普通教育ヲ兒童ニ授ケントスル町村ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第十九條 學校ニ公立私立ノ別アリ地方稅若クハ町村ノ公費ヲ以テ設置セルモノヲ公立學校トシ一人若クハ數人ノ私費ヲ以テ設置セルモノヲ私立學校トス

第二十條 公立學校幼稚園書籍館等ノ設置廢止其府縣立ニ係ルモノハ文部卿ノ認可ヲ經ヘク其町村立ニ係ルモノハ府知事縣令ノ認可

ヲ經ヘシ

第二十一條 私立學校幼稚園書籍館等ノ設置ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘク其廢止ハ府知事縣令ニ開申スヘシ

但公立小學校ニ代用スル私立小學校ノ廢止ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第二十二條 町村立私立學校幼稚園書籍館等設置廢止ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第二十三條 小學校ノ教則ハ文部卿頒布スル所ノ綱領ニ基キ府知事縣令土地ノ情況ヲ量リテ之ヲ編制シ文部卿ノ認可ヲ經テ管内ニ施行スヘシ

但府知事縣令施行スル所ノ教則ニ準據シ難キ場合アリテ之ヲ斟酌

酌増減セントシ府知事縣令之ヲ許可セントスルトキハ其意見ヲ付シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第二十四條 公立學校ノ費用府縣會ノ議定ニ係レルモノハ地方稅ヨリ支辨シ町村人民ノ協議ニ係レルモノハ町村費ヨリ支辨スヘシ

第二十五條 町村費ヲ以テ設置保護スル學校ニ於テ補助ヲ地方稅ニ要スルトキハ府縣會ノ議定ヲ經テ之ヲ施行スルコトヲ得ヘシ

第二十六條 公立學校ノ敷地ハ免稅タルヘシ

第二十七條 凡學事ニ供スル寄附金等ハ其寄附人ヨリ指定セシ目途ノ外ニ支消スルコトヲ得ス

第二十八條 削除

第二十九條 削除

第三十條 削除

第三十一條 削除

第三十二條 削除

第三十三條 各府縣ハ小學校教員ヲ養成センカ爲ニ師範學校ヲ設置スヘシ

第三十四條 公立師範學校ニ於テハ本校卒業ノ生徒ニ試験ノ後卒業證書ヲ與フヘシ

第三十五條 公立師範學校ハ本校ニ入學セサルモノト雖モ卒業證書ヲ請フモノアラハ其學業ヲ試験シ合格ノモノニハ卒業證書ヲ與フヘシ

第三十六條 削除

第三十七條 教員ハ男女ノ別ナク年齡十八年以上タルヘシ

但品行不正ナルモノハ教員タルコトヲ得ス

第三十八條 小學校教員ハ官立公立師範學校ノ卒業證書ヲ有スルモノトス

但本文師範學校ノ卒業證書ヲ有セスト雖モ府知事縣令ヨリ教員免許狀ヲ得タルモノハ其府縣ニ於テ教員タルモ妨ゲナシ

第三十九條 文部卿ハ時々吏員ヲ府縣ニ發遣シ學事ノ實況ヲ巡視セシムヘシ

第四十條 公私學校ニ於テハ文部卿ヨリ發遣セル吏員ノ巡視ヲ拒ムコトヲ得ス

第四十一條 府知事縣令ハ管内學事ノ實狀ヲ記載シテ毎年文部卿ニ

申報スヘシ

第四十二條 凡學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルコトヲ得ス

但小學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルモ妨ケナシ

第四十三條 凡學校ニ於テ授業料ヲ收ムルト收メサルトハ其便宜ニ任スヘシ

第四十四條 凡兒童ハ種痘或ハ天然痘ヲ歴タルモノニアラサレハ入學スルコトヲ得ス

第四十五條 傳染病ニ罹ルモノハ學校ニ出入スルコトヲ得ス

第四十六條 凡學校ニ於テハ生徒ニ體罰或ハ縛スルノ類ヲ加フヘカラス

第四十七條 生徒試験ノトキハ父母或ハ後見人等其學校ニ來觀スルコトヲ得ヘシ

十

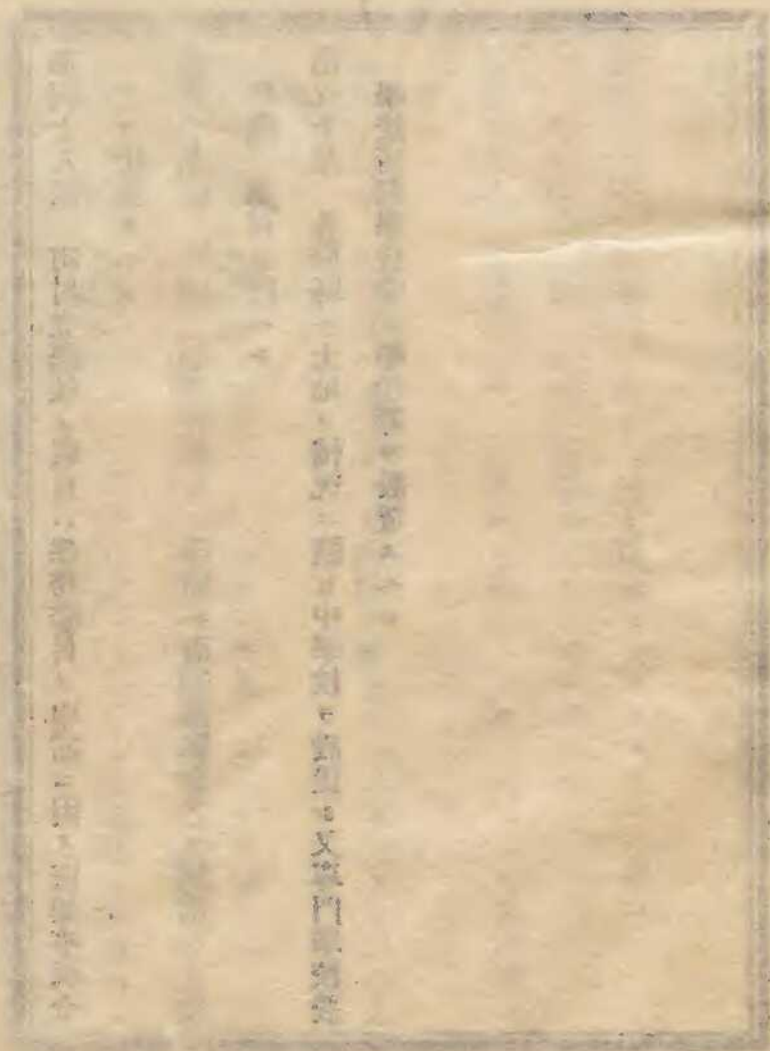
第四十八條 町村立學校ノ教員ハ學務委員ノ申請ニ因リ府知事縣令

之ヲ任免スヘシ

第四十九條 町村立小學校教員ノ俸額ハ府知事縣令之ヲ規定シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第五十條 各府縣ハ土地ノ情況ニ隨ヒ中學校ヲ設置シ又專門學校農學校商業學校職工學校等ヲ設置スヘシ

十一



明治十二年十二月二十日具議定上奏

事以教育令改正案第三條中讀書習字等
術地理歷史修身之ヲ修身讀書習字等術
地理歷史之ヲ改ノ別紙ノ通改布告ノ後于
院修紀ノ改付也事

明治十二年十二月二十日

太政大臣

議長小島久

上申

乾第二百二十號

去ル十三年十二月廿八日下付有之候教育令改正
案第三條中改正ノ儀布告今廿四日檢視ヲ經過
シ本案致奉還候條御上奏有之度候也

明治十四年一月廿四日

議長大木喬任

太政大臣三條實美殿

去ル十三年十二月廿八日本院ノ檢視ニ付セラレシ所
ノ教育令改正案第三條中改正ノ儀布告今
昔日檢視ヲ經過ス仍テ本案ヲ奉還シテ謹テ
之ヲ上奏ス

明治四年一月昔議長正四位勲一等大木喬任



元老院

揭

元老院上奏教育令改正案第三條中改正
布告檢視濟之事

右謹テ奏ス

明治十四年一月廿九日

太政大臣三條實美



左大臣熾仁親王



右大臣岩倉具視



大文官

文甲三〇号

明治十四年一月廿四日

大臣

奏

内閣書記官

印

元老院上奏教育令改正案第三條中改正
布告檢視濟之事



大
政
官